
蝶姫

檸檬

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶姫

【Nコード】

N2963R

【作者名】

檸檬

【あらすじ】

桜花、海龍そして――――蝶姫。

「お前が好きだ」×「大好きだよ」

叶わない。そう言われ続けた恋。
儚く、淡い物語り――

—
ドカツ！ バキッツ！

「弱い。この程度で私には勝てない」

またね。同じ事の繰り返し。

私に勝てる者なんて居ないから。

私の前には100人あまりの倒れた人達

全員武器を持っているのに対して
私は————素手。

私の名前は佐久間さくまりん懔
高校生。

「お、お前っ……何者だっ……!!?」

まだ喋れたんだ。

まあ、、ねえ

「私？世間では……蝶姫そう呼ばれてるけど」

みるみるうちに青ざめていく男。

「ちょ、蝶姫だとおッ、、、、！」

馬鹿ね、、、、、、。

「そうよ、じゃあそろそろお別れね。
バイバイ、、、、、、、、、、」

ドスッ・・・・・・・・・・

「ぐはぁッー！」

明日も、同じよね。

私は全国No.1の桜花の総長であり、
伝説の蝶姫。

蝶姫は深夜10時に現れる。

桜花は決して無駄な争いはしない。
せこい手を使わない正統派の族。

最強の桜花とNo.2の海龍
出会ってはいけない2つが出会う時
運命はどうなる――？

「ただいまあ、、、

まあ、誰も居るわけ無いよね」

携帯を開くと、1件のメール。

「陸にいい？こんな時間に、、

珍しいなあ、」

陸にいいは本名佐久間陸矢。
私のお兄ちゃん。

メールの内容は

（愛しの懐へ？

明日から三和高校に入学してね！）

はあ．．．．スコンやめて欲しいんだけど

返事はYES。

明日から通えと言われた。
制服は既に届いていた、、

さすが、ね桜花11代目総長 白豹。

明日から楽しみねえ、、、、

――この時、慄は忘れていたのだ。

海龍の存在を――――、、、、

久し振りに胸を踊らせて、
眠りについた慄だった、、、、

「ん、、、、、

朝、、、、？今日から学校ね」
クスッ、、、、

まだ新しい制服を着て、
朝食を食べて、、、、、、

そろそろ出ようかなあ

「君可愛いね？？今から学校？
サボって俺と遊ばない？」

ハア、、、、これで6人目。
外に出たらこれだよ、うざい。

全て無視して、やっと三和高校に到着。

「理事長室・・・・・・・・何処かな？」

迷ったの誰かに聞いて見る事にした

「あの、理事長室どこですか？」

敬語を使つて聞くと、
振り返ったその人は一瞬固まり

「あ、ああ理事長室か、
ここを真っ直ぐ行つて
右に曲がったらすぐだよ」

丁寧の説明するんだね・・・
不良校だからといって
全員悪いわけじゃないからね。

「ありがとう」

にこりと作り笑いをすると、
その人にが眉に皺を寄せて

「その笑い方やめろ。
お前、転校生か名前なんだ？」

私の作り笑いに気づくなんて・・・
この人何者？

「人に名前を聞くなり自分から
名乗るべきでしょう？」

そう言うと、瞳を見開き
驚いた顔をしていた。

「ククッ、、俺を知らないのか。
そうだな、俺は柊煉^{ひいらぎれん}」

今日会ったばかりなんだから
知らないし、、

「そう、、私は佐久間慄よ、煉」

急がなくちゃ、、時間が無い

「じゃあ、行くから」

そう言ってから急いで理事長室に
向かった。

「佐久間懔、ゝ、か」

そんな事をつぶやいている事も知らず。

コンコン、ゝ、ゝ

「失礼します。佐久間懔です」

そういい、入ると

「りーーーーんちゃああん！」

ドスッ、ゝ、ゝ

「ぐッ、ゝ、強ッ！」

そう抱きつこうとしてきたのは
陸に이었다。

つい殴ってしまった。

「陸にい？何してるのかしら？」

にっこり笑うと引きつりながらも
わらう陸にい。

「り、懍？怖いよ？

一応俺ここの理事長だからね？」

以外―陸にいが理事長とかね・・・

そんなやり取りをしていると

「「「失礼します」」」

誰かが入ってきた。

でも、聞き覚えのある声・・・？
この気配も知ってる。

その人達が入って来ると
私はフリーズした

「来、柚木、優弥、冬夜？

なぜここに、、、？」

「「「「「懨？」」」」」

おお！見事にハモった！

いやいやそうじゃなくて！

何故か桜花の幹部が全員いるのだ。

「陸にい、説明してくれるよね？」

につこり黒い笑みを浮かべると、

「わ、分かった！ちよっ怖ッ！」

説明を受けたあと、しつかり

お仕置もしてから理事長室を出た。

「懨くどうすんの？」

俺らは一緒に行動するけど？」

來が言う。

「そうね、私は別行動よ。

総長は男だと思われているし
バレると厄介だわ」

「えゝ懍とられないの？

まあ理由が仕方ないけど、、、」

柚木は男なのに可愛いっ！

黒い時もあるけどね、、、、

「ごめんなさい、柚木。

ここには海龍が居るらしいの。

だからさらに厄介なのよ、

でももしもの時は駆けつけるから」

海龍、、厄介ねえ

関わら無いようにしなくちゃ、、、

四

職員室へ行き、

「佐久間懔です。」

月島先生いらっしゃいますか？」

この時私は忘れていたんだ。

”月島”という名を。

「懔さん！

なんでここに居るんですか？」

月島先生は私を見るなりそう言ってきた
小さな小さな声で、、、、

「^{かなた}奏ね？でもここはまずい
廊下に出よう？」

私も奏にだけ聞こえるように言い、
廊下へでた。

「なんでココに奏がいるの？」

まあ、私の担任が奏なのは、

陸にいがそうしたんだろうけどね」

冷静に私が言っていると、奏が

「転校生が来るのは知ってたんですけど

まさか慟さんとは思いませんでした

陸矢もやってくれますね……………」

確かにそうね。

まんまと陸にいの罠に引っかかったわ

「来達まで転校させて来たの。

全くなに考えてるのか、、

まあ、既にお仕置は済んでるけど」

にっこり笑ってそういうと、

「そっそうですか、教室行きましょう？」

もうすぐHRですから。

慄さんは1 - 2です。

俺が呼んだら入って来てください。」

そんなに怖がらなくてもいいのにね？

奏は桜花11代目副総長。

ぎゃーぎゃーうるさい教室に奏が入って行く

「うるせえ！本齡鳴っただろ！」

その一言で

シーン、、、、

静まり返った。

そんな怖かったかしら？

「転入生だ。慄さん、入ってください」

その瞬間、

「野郎はいらねー？」

「男はパシリだああ！女だせー？」

「うるせえッつつてんだろっが！」

ガララッ

「懨さん、自己紹介してください」

私に微笑む奏に応えるように
私も微笑みかえす。

「、、、、佐久間懨です」

名前だけ言い、
もついででしょうか？という視線を
奏に送る。

「、、、、それだけ？」

ん、じゃあ席は窓際の1番後ろです」

特等席

ま、当たり前。

「うわ、、、、」

「やべえっ」

とか席へ行く途中で色んな反応をみた。

みんなどうしたの？
なんか変なのかな？

キンコーンカーン、、、

「なあっ俺、三島祥^{みしましやう}

って言うんだ！よろしく、懔」

前の席の男の子が喋り掛けて来た。

「ええ、よろしく。祥」

眠かったのでそれだけ言って寝ようとする

「俺の事、知らねえのか？」

知ってる訳ないし、、、
始めて会ったんだから、、、、

「その顔、知らねえんだな？」

へえ、初めて会ったなこんな奴。

俺は、海龍の幹部なんだ」

海龍？

それはまずい．．．．．よりによって幹部なんて

でもクラスメイト何だから仕方ないし

「そう、、、私眠いの。ほつといて？」

どうでもよかったのでそう言つと、

とても驚いた顔をしている祥がいた

「ほんと、変わった女だな？」

大体の女は媚びて来るか、

怯えるかのどちらかなのに・・・
奏さん敬語だし”さん”付けだし」

はぁ？私が媚びる？怯える？

ありえない。

桜花の現総長であり、蝶姫である私が？

「私は興味ない。

眠いつて言ってるでしょ？

怖くもない。」

言い放ち、寝る態勢に入る。

なのに、、、、、、、、、

ぐいッ！

祥に腕を引っ張られ、立ち上がらされた

「何よ、、、、」

睨んでいうと、

「着いて来て。」

一言言われたので

教室から出ていき、ついて行くと、

――― 屋上に着いた。

「みっんなー！面白いもの見つけた！」

ぐいつと前に押し出された

「ちよつと、祥！何するの！」

私、物じゃないし！」

クルツと祥の方を向いて言った。

「、、、、、懔？」

誰かに呼ばれて、ふりかえると

「煉？ねえ、祥どうにかしてよ

眠いのに関れ出されて、ゝゝゝ」

周りにいる知らない人たちが
驚いた顔で私をみている。

「煉にそんな風にいうなんて、ゝ」

銀髪に青のメツシュの人がいう。

「ははっ！ありえねえよこいつ！」

今度は金髪。

「そうだな、初めてだなゝ
こんな人」

次は黒髪。

「・・・・・・・・・・」

空色の髪の人は無言。

「ちよつと祥！この人達誰？
まさか、海龍の人？」

もしそうなら最悪、、

「ああ、そうだよ。俺の仲間」

やっぱり、、ありえない、、

「俺は前田千津まえだせつ

千津って呼んで！」

銀髪メツシュ。

「俺は、苑間諒そのまりよう

諒って呼んでね！」

金髪。可愛い系ね

「俺は、池波朱鳥いけなみあすか

朱鳥でいい」

黒髪。この人、デキるわ。

「……浅尾楷あさおかい」

空色の髪。おそらく女嫌いね、

「私は佐久間慄よ」

大変な事になった、

海龍と思いつきり関わってしまった
陸にいと奏でもさすがに怒るって！

「煉！私、帰るっ、きゃあっ！」

も~~~~ッ！何してくれんの？

これじゃあ煉に抱きついてるみたいじゃん

「離してよッ！煉！」

ばたばた煉の腕の中で暴れる。

「なあ慄、蝶姫か桜花の情報知らね？
なんでもいいからさ」

落ち着いた声でいきなり聞かれた

「……………なんで？」

聞き返す

「桜花は敵だし、蝶姫は……………」

俺らの憧れだから。

搜してるんだ」

そうだった。桜花は海龍にとって敵

だけど、蝶姫が、憧れの蝶姫が
桜花の総長と知ったら、どうするの？
貴方の腕の中に居る私と言ったら？

五

――放課後

早く桜花の倉庫へ行かないと、
おそらくあの人達が、、、

「りーん！帰ろ？」

やっぱり、煉達に言われてるんだ、

「ごめんなさい。今日は用事があるから」

うつん、本当は”今日”じゃない。
”これから”もずっと。

桜花と海龍は敵どうし。
関わってはいけないの、、

「えー？俺等の倉庫行くんだ！
煉が連れて来たって」

煉はバカだよ、何も知らないんだから。

「無理なの。後、私にこれ以上
関わら無いほうがいいよ」

それに私が桜花の総長と知ったら、
敵視するんでしょう？

「おい、祥。さつさと慄連れて来い」

教室までズカズカ入って来た煉達。
私の腕を引っ張って行く。

「煉！用があるんだってば！」

校門まで来た時、私が煉に言っと
煉が立ち止まる。

「じゃあ、お前誰？」

朱鳥が調べても何の情報もあがない」

こんな事一度も無かったと言う煉。

まあ、当たり前ね。

私の情報は冬夜が完全にロックをしている

「そう、残念だったわね。」

煉の手を振り払って歩く。

「私を調べても何もでない。」

でるわけじゃない……..
蝶姫の情報は陸にいに任せてあるし。」

そんな独り言を言いながら、
帰っていった……..
.

六

あの後家へ帰って着替える。
すぐに桜花の倉庫へ向かう

「來に連絡しなくちゃ、、、」

電話を掛けると、1コールで出た。

『懐か？何やってんだよ！早く来い。
みんな心配してたんだぞ？』

やつぱり怒ってるかあ、、、
着いたらみっちり叱られちゃうよ、

「分かってる、心配してくれてありがとう。
今すぐ向かうから」

來達になら蝶姫の事言ってもいい。
今日。今日言わなくちゃ。
海龍に関わった以上隠し事はできない

桜花の倉庫に着いて
來に着いたとメールを打ち、
入ると・・・・・・・・・・

「りーん！会いたかったよー！」

ぎゅっ

「きゃあッ！柚木？危ないよ……
飛びついたりすると……ね？」

いきなり抱きついてきたのは柚木。

いっつも甘えて来て、
可愛い物が好きな私は嫌じゃない。

「だってー学校でもしたかったけど
慄を危険にさらしたくないから、
我慢してたんだよっ？」

にこにこ笑いながらいう柚木。

「おーい、またやってんのか柚木。
みんな居るからこっちでやりな？」

呆れ顔で言っ て来る冬夜。

「はーい！行こう？ 懺」

私が頷くと私の前を歩く柚木

「総長！柚木さん！こんにちわ！」

まわりから聞こえる挨拶を
かえしながら進んでいった。

「来ー冬夜ー優弥ー学校ぶり？」

幹部室に入っ て挨拶（？）を言う。

私の席はなぜか当然の様に柚木の膝の上。

「ねえ、皆。大切な話が2つあるの」

私の髪を撫でていた柚木の手も
2人でゲームしていた来と優弥の手も

パソコンをいじっていた冬夜の手も

皆止まった。

「1つ目は私が海龍に関わってしまった事

まだ、何も知られていないみたい。

2つ目は私が海龍に関わってしまったから

言うの。いつか話そうと思っていたけど

アノ蝶姫は私。この事は陸にしか知らない」

皆さん固まっちゃったねー……………

どうしよ……………

「柚木つ来つ冬夜つ優弥あ！

固まってないでなんか言つてよ！」

いつまで固まってるの？

柚木も固まるなら離してからにしてよ

「蝶姫が．．．．．懔？

で、でも蝶姫は青い髪に青い瞳だ」

確かに私は髪も瞳も黒だけど．．．．．

「あー．．．それは、んーっ

まあ、いつか！

実を言うとカツラです。

本当の色が青。」

はい！隠れ衝撃事実ー！

いや、嘘です。忘れてた髪の色。

カラコンとカツラをとって、

本当の色をだす。

「うわあっ……………！綺麗な青色だあ！」

柚木、苦しいです。窒息するっ！

「皆、ごめんね？今まで言わなくて。

言いたくなかったわけじゃないの
きつと、言っても何も変わらないから
どっちでもいいかなって思ってた」

でも、どんな事でも隠しちゃ駄目だよね

「いや……………本気で吃驚したけど

慄にとつて俺らが隠し事したくない
って思える存在になれてよかったよ」

さすが来ねえっ！

どんなに子供っぽくても頼りになる。

「っ今まで…………ど…………うりにっしてっくれる？」

もう、泣いちゃったじゃん。
みんなが優しいから。
ココが暖かいから。

「「「「あぁっ（うんっ）！」「」「」

それからみんなやりたい事やり始めた

柚木は私の青い髪を撫でながら私と話、
來と優弥はゲームをやって
冬夜はパソコンをいじっている。

いつもの光景。

少し違うのは私の髪が青い事。

――――ありがとう、みんな

「ねえ！懨はこれから俺らと学校でも一緒に居れない？」

可愛いよ。柚木は可愛いけど！

「それは無理だと思うよ。」

海龍達はあなたが幹部って事を知ってる。その中に総長と思われるいない私がいると不自然すぎる。ごめんね」

私もこの人達と一緒に居たい。でも、出来ないよ……………」

「じゃあさ、もう総長だつて言うのは？」

俺は懨が嫌じゃなければ言ってもいい」

みんなに？総長って事を？そんな事考えた事なかった……………」

まさか冬夜が言っなんて・・・
一番反対しそうなのに。

「來も柚木も優弥もいいの？」

全国No.1の総長が私って知られても？
強さには自信がある。
でも、女なんだよ？

「「「懨が決めるなら」「」」

みんなが同意した今、決断するのは私。

「・・・・・・・・・・私、皆と一緒に居たいな」

もう、いいんじゃないかな？
転校早々ばれちゃうけど、不良校だし？

「ほんと？懨と学校でも居れるの？」

ほら、

私の一言でこんなに喜んでくれる人がいる。

それだけで、幸せだよな？

「うん。陸にいいクラス替えてもらう
誰と同じにしようかなあ？」

「あれ？言ってなかった？
俺ら全員同じクラスなんだよなー」

はー？聞いてないし！

「そう、よかった！今日言つとく。
明日からなれるかもしれないね！」

満面の笑みで笑うと、
みんな顔があかくなった。

「みんな顔赤いけど、風邪でもひいた？
うつさないでよー？」

来達はおなじ事を考えていました。
(・・・っ！ ￥￥ ￥￥ ￥￥ 無自覚やべえ！)

「んじゃ、そろそろ帰るよ。
ばいばいー!」

九

――佐久間宅で……………

「ただいま！陸にい、いるー？」

話すなら早い方がいいしね！

「懐！どうしたんだ？

俺とそんなに話したいのか！」

無駄な＋思考どうにかならない？
こっちが疲れる……………

「お願いがあるんだけど……………

私、海龍と関わっちゃったの。
来達と同じクラスにしてほしいなって
少なからず安全だし……………ダメ？」

うるうる瞳＋上目遣いでお願ひすれば
大体の男はきいてくれるって言われたし。

「（か、可愛いつ！）分かった。」

やったね！陸にいても当てはまるんだ

「陸にいとありがと　おやすみい」

明日から楽しみい！

十

――登校後

「慄！おはよー！」

ぎゅうつ！

「ゆ、柚木！苦しいよっ」

そして女子の皆様の視線が痛い。

「冬夜あつっ！助けてえ」

柚木を止めてくださいいい！

「柚木、慄が可哀想。離れろ。」

魔王の顔をした神様がいる！

「はぁーい・・・」

柚木は拗ねても可愛いよっ
私にも分けて欲しいなー・・・

（懐も十分可愛いよっ！by作者）

「ありがとっ 冬夜」

にこつと笑ってお礼を言ってから
用意された席に座る。

当たり前のように、私の周りは来達。

担任まで奏になってるし・・・

「なんで奏さん着いてきてんだよ！」

ほーら、来も吃驚してるよー

「おい、来！俺の授業で喋るとは
いい度胸してるなあ！」

ありゃー……

来達には怒るんだー……………

仕方ない、助けてあげよう。

「奏、私が來に喋りかけたの。

ごめんなさい？」

奏が少し困った顔をしてから、

「そうですか、喋ったら駄目です」

私だけへの喋り方で話す。

「はい。気をつけます」

授業が再開された。

「はあー……………」

慄、ありがと。奏さんってほんと、
慄には甘いよなあー」

そんな事ないと思うけどなあ・・・
奏はみんなに優しいでしょ・・・？

「どういたしましてっ
」

キンコンカン・・・

バンツッ！

乱暴に教室の扉が開いた。

来、柚木、優弥、冬夜と
話していた私は気に止めなかった。

「懔！懔はいるか！」

名前を呼ばれて振り向くと、
そこには・・・海龍。棟達がいた。

「なんで・・・来るの・・・」

呟いて、來達の方を見ると
柚木が握ってる私の手に力をこめる。

「懐・・・！なんでここに居る？」

なんで桜花の奴らと居るんだよ・・・？」

悲しみと怒りのこもった瞳で
私達を見ている棟達。

ごめんなさい・・・みんな・・・

「來、柚木、優弥、冬夜來て。

棟達と話そう？

あの人達には言うしかないみたい」

みんな困った顔をしたけど、
ついてきてくれた。

「棟、行こう。少し話そうか」

私の手を握ったままの柚木を引っ張って
歩く。

その後を來達と棟達が続く。

周りからみればおかしな光景だろう。

敵同士である桜花と海龍が

並んで廊下を歩いてるんだから。

裏庭に連れて行って人が居ないのを
確認して、座った。

「ごめんね、クラス替えたりして。

でも、奏が担任じゃなければ怖くないでしょ？

心配・・・してたらごめんね。」

できるだけ、話をそらしたくて。

こんな話を話すのが嫌で。

「懺！なんで・・・？

話をそらすなよ！聞かせてくれよ・・・」

弱々しい声で話す棟に心が痛む。

千津、朱鳥、楷、祥の軽蔑するような
視線がここまで効くとはね・・・

一緒に居たのは1週間くらいなのに・・・

泣きそうになるよ．．．．

「ごめんなさい．．．」

貴方達を傷付けるつもりはなかった．．

私はもう貴方達とは居られないの。

この人達が1番大切だから．．．」

駄目．．泣いちゃだめ．．．

棟達にこんな瞳にさせてるのは私。

私がもつと突き放せばよかったんだ．．

「懺．．．．」

手を握ってるから柚木には分かつちゃうね

私が震えている事が．．．

「懺．．お前は．．桜花の何だ？」

ハハツ・・・”桜花の何”か・・・
単刀直入だなあ・・・

「私が誰なのか知れば、

貴方達はきっと私には関わらなくなる」

当たり前だよな？

敵の総長と関わるなんてありえない

「お前らは幹部だろ？総長はどこだ。

総長と話したい。」

棟・・・まだ気付かないの？

あなたの目の前の私が総長なのに・・・

「棟、話す必要はないよ。

桜花の総長はここにいる。」

もう、棟達も気付いたでしょ？

「どういう・・・ことだ・・・？」

まだ気付かないの？

頭で整理が出来ないみたいだね・・・

「私は、

桜花12代目総長、佐久間懔」

「「「「「は・・・？」「」「」

そりゃ吃驚するよねー・・・

全国No.1の総長が女なんだから。

「ごめんね、でも祥に言っただはすだよ？

私に関わらないでって。

もう戻ろう来、柚木、優弥、冬夜」

立ち上がったその時・・・

「おい、待てよ！言い逃げか？」

棟・・・もう関わっちゃ駄目なんだよ？
今ならまだひきかえせるでしょ？

「何？私が誰なのか分かったんだから
もう十分でしょ？」

これ以上桜花に深入りしないで！
貴方達とは争いたくないの・・・」

私は争うなら桜花のために本気でいく
だけど、そうなれば棟達が怪我する。

「女のお前に俺らが負けるとでも？
海龍をあまりなめるな」

棟は分かっでないね。
棟達幹部が全員でかかってきても、
私には勝てない。

「海龍をなめてるつもりはないよ。
確かに貴方達は強い。」

「けど・・・私には勝てないよ」

来達は私にあまり戦ってほしくないみたい
分かってるよ。

「懍！戦っちゃ駄目だよ・・・
またあんな事になれば・・・！」

柚木・・・心配かけてごめんね。
でも、桜花のためなら戦う。

「柚木、あんな風になっちゃったら
止めてくれる？もし駄目だったら・・・
陸にいと奏を呼んでね。大丈夫だよ」

海龍程度の力ではあんな事には
ならないだろう。

「じゃあ、お相手願いましうか。
海龍さん？誰からくる？
全員でもかまわないよ」

笑う私に対して、

悲しみを含んだ瞳の棟。

「よりによつてなんで桜花なんだよ．．．．
1人に対して5人は卑怯だろう？
1人^ずつ出させてもらう。」

甘い．．．．棟。

何人きても変わらないよ

「始めは誰がくる？」

「そつだな．．．千津、行け」

千津ね．．．この中で1番弱いね．．

「まさか慄と戦うとはなあ．．
手加減抜きでいかせてもらう」

「手加減？当たり前。必要ないよ
じゃ、スタート……」

合図で始まる。

拳が正面から飛んでくる。

「いい拳ね。だけど、遅い……」

ドスツ……！

拳をかわして、

千津の横っ腹に蹴りを一発いれる。

「……ッく」

ドサッ

「「「千津！」「」」

千津が倒れた。

「だから言ったでしょ？勝てないって

冬夜、治療してあげて。

あまり酷くないはずだから・・・」

冬夜に治療を任せて、次の戦い。

「一気に来てよ。

1人では無理だと分かったでしょ？」

驚いた顔をしている棟達。

1発でやられるとは思ってなかったでしょうね

「ハツタリでも無かったようだな。

次は3人だ」

3人？全員でこればいいのに・・・

「いいよ。棟以外？」

「ああ。朱鳥は副だ強いぞ」

ほかの幹部よりは・・・でしょ？

「懔・・・全部、嘘だったのか？」

「・・・・・・・・・・裏切者」

「懔・・・あなたは優しい」

今までの時間は”嘘”じゃない。

裏切ったわけじゃない。

優しくなんかない。

だけど、そんな事言うしかく無いよね・・・

「・・・・・・・・スタート」

私が悪いの・・・全部、全部私が・・・

3人相手でもすぐ終った。

「祥、ごめんね。楷、その色好きだった。」

朱鳥、私は酷い女だよ」

後は、棟だけ。

「棟、ごめんね……」

あなたの仲間を傷付けて……」

本当はこんな事したくないよ……
でも仕方ないでしょう？

「懐……お前は美しく強い女だ。
けれど、気取らず優しい。
そこに惹かれたのかもしれない……」

そんな言葉を今言うのはずるいよ
………棟

「ごめんなさい、

今はすぐ決着を着ける。
後でみんなの事見にいくから……」

私が傷付けたんだから
少しだけいいでしょう？

パシッ！

総長なだけあつて威力が違うね・・・
でも私に勝てるほどでもない。

バキいッツ・・・

「終わった・・・・・・・・ね」

グイッ・・・・・・・・ぎゅっ

「ゆ・・・ずき？どうしたの
私、大丈夫だよ？」

「大丈夫なら、泣かないでよ・・・
手加減してたじゃん・・・」

私・・・泣いてるの？

頬に触れると何かが伝っていった。
――――涙？

「ほんとだ・・・なんで泣いてんだろ？」

柚木、棟達のとこ行ってくるよ。

ちよっと待ってて？」

棟に約束したから、いかないと・・・

「嫌だ。俺もついてく！」

もう・・・ワガママなんだから・・・

でもこれが柚木の優しさなんだもんね？

「じゃあ、行こっか？」

來達は待っててね、ごめん」

――棟達の所で・・・

「棟・・・みんな、大丈夫？」

休ませてある場所へ行き、
声をかけた。

「よく、ノコノコとこれだな？」

大丈夫？だと？なにいつてんだよ！
お前がやったんだろ！」

楷・・・初めて会話をした言葉がこれかあ・・・

ヤバイよまた、泣いちゃうよ・・・

「ごめんなさい、本当にごめんなさい。

棟・・・少し話したいんだけど・・・
歩けるかな・・・？」

駄目だ・・・ここに居たら泣く。
棟だけでもいい・・・

「ああ、行くよ。」

こんな事をした私に今も優しく話してくれる。

「そんな奴と話さなくていいだろ！

俺らを裏切った奴なんかと！」

いや・・・もう・・・ヤメテ・・・
聞きたくない・・・

視界が滲んでくる・・・

「楷！少し黙ってろ！」

れ・・・ん・・・？
なんで私のために怒ってくれるの？

「チツ・・・」

ごめんね、ごめん。

「棟、私は本当に知らなかった。

棟達から海龍って聞くまで誰か分からなかった
少なかったけど棟達との時間は楽しかった
だけど私は桜花の総長。

貴方達という事はできないの。

でもこれは言い訳だよな？

楷の言ったとおりだよ。

私はっ棟達を・・・裏・・・切った」

あーあ駄目じゃん・・・

泣いちゃ駄目じゃん・・・

「慥・・・？裏切ろうとして裏切った奴が

泣く？慥は俺らと居て楽しかったんだろ？

だったらそれでいいじゃん。

慥は裏切ってなんかないよ」

子供をあやすような優しい口調で
棟がはなす。

「でもっ！

棟達は私の事知らなかったからっ・・・！」

そう。知らなかったから優しくした。

知ったら敵として瞳に映ってた。

「棟って奴は分かってくれたじゃん

來のところに戻ろうよ？」

慄は笑ってる方がいい……」

私を後ろから抱き締める柚木。

心配しているのがよく分かる声。

「ハッ！なにが”ごめんなさい”だ

さっきから思ってたんだけどさ、

ずっとそいつとくっ付いてて

結局は桜花の仲を見せつけにきた

だけじゃねえの？」

ああ、もう駄目だ……

ここには戻れないよ……

楷が認めてくれないだろうなあ……

「……っ！ごめんねっ……

棟……サヨナラ」

私は柚木を連れて、走る。
泣きながら走って來達のとこに戻る。

途中で止まって、

「柚木・・・ごめんねっ？」

でも・・・あそこまで言われるとっ
さすがに・・・キツイよぉ・・・」

ボロボロ泣いて、

そして私は眠ってしまった。

「懐、おやすみ・・・」

よく、頑張ったね・・・」

優しく囁く柚木の言葉は

眠っている懐には届かない――――

十四

――慥達が居なくなった後の棟達

(棟sida)

「なあ・・・楷、

あれは言い過ぎだと思う。」

ベッドから起き上がった祥が言う。

「っんでだよ？あいつは裏切った！」

俺も、

楷があそこまで怒るのは初めてみた。

「あの時だったら、総長以外にも言えたはず。

慥は俺等に分かってほしかったんじゃないか？

俺等を少しでも信じていたんじゃないか？」

珍しく、朱鳥まで慥の味方になっている

「分かるって何を？」

　　懔は実際俺等に正体を隠してた！」

「もういいだろ？懔が泣いた……」

　　懔は俺等の前で泣いた事は無かった」

俺等の前では見せなかった弱味を

あいつ等の前では見せている事に苛立つ

「裏庭でも、ココでも懔といた

あいつは誰なんだ？

確か……柚木って呼んでたな……」

他の奴よりもずっと懔の近くに居た。

「棟、そいつを調べるか？」

いや、恐らく桜花の幹部なら……

「いや、いい。」

　　情報は何もあがってこないと思う

直接……聞く。」

明日、必ず。

十五

―――次の日

私は昨日のように来達と話していた。

くくく

私の携帯が鳴った。

着信画面を見ると・・・棟？

少し出るのを躊躇ったけど
出る事にした。

「・・・はい・・・棟？」

『懐か？昨日はごめんな。』

そこに柚木って奴いるか？
』

「・・・いる・・・けど」

『そいつにかわってくれる？』

「うん……。柚木、かわって」

携帯を渡すと不思議そうな顔をしていた。

なんで柚木なの？

携帯が返されて、

「ごめーん、ちょっと行ってくるー」

なんで？どこ行くの？

「柚木？どこ行くの？

待ってよ、私も行く！」

いつの間にか私と柚木は1セット。

なにより私は不安感がおしよせた。

”また”大切な人がいなくなっちゃう。
大きな恐怖感が。

「慄も来るの？んー……。まあ、いつか

1人でとかいわれてないからね
じゃ、いつてきまーす！」

柚木についていき、着いた場所には
棟と朱鳥がいた。

棟は柚木の後ろにいる私を見ると
苦笑いして、

「やっぱり慥も来たかぁ・・・」

と言った。

棟が朱鳥しか連れて来なかったのは
昨日の事があるから、
棟の優しさだろう。

「で？聞きたい事って何？」

まだ・・・なにか聞きたい事あるの？

「ああ、お前と慥はどういう関係だ？」

言いたい事は分かる。
私と柚木はいつも一緒。

「どつって総長と幹部だけど？
それ以外になにが？」

そう。私達は総長と幹部。
来達より一緒の時間が長いだけ

「ほかに・・・あるだろう？
他の幹部とは違う事が」

なんで、
こんな事を聞くの？

「柚木っ・・・帰ろうよ」

もういいでしょ？
私に関わらないで。
これ以上私の大切な人を奪わないでよ

「大丈夫だよ懍。
俺はいなくならないから。」

慟を独りにしないから」

もう、

アノ人達のように・・

お母さんとお父さんのように・・

誰も、失いたくないの・・・

「海龍の総長さん、

別にそんなに深い関係じゃない。

ただ、幼馴染って事だけ

昔から知ってるからね」

私と柚木は幼馴染。

だから柚木は知ってるんだ。

アノ事件を・・・・・・

「なるほどな・・・

慟、もう屋上に来てくれない？

俺は来てほしい」

なにいつてるの？

いけるわけないのに・・・

「楷が可哀想だよ。

楷の居場所は海龍だけでしょ？
そこに私が居てはいけない。
私の事を棟はわかってくれた
私はそれだけで十分だよ」

本当は、海龍と桜花はなぜ敵なの？
って思っちゃうよ・・・

仲間ならこんな事にもならなかったのに

「慄、仲間なら来るか？

仲間になれたらそいつの様に
そばに居てくれるか？」

本当に・・・

仲間になれたらいいのに・・・

「そうだね、でも無理な話でしょ？」

無理に・・・決まってるよ

「なら、同盟を結ばないか？
俺等が仲間になったら
争いも減る」

ど．．う．．めい？

「は．．．．？」

柚木も吃驚してるよ

「じゃ、考えといてな」

うー……どうしよう……

あれから学校も終わったけど、
倉庫へは寄らずに家へ帰った。

同盟？いきなり言われても困るよ……

）
）

最近よく鳴るなー

ディスプレイを確認すると、優弥だった

珍しいなあ、優弥が電話してくるとか

「もしもしー優弥？どうしたー？」

『懐？助けてくれー来達に殺されるー

ってギャー？来やがった！

早く扉開けてくれ！』

「はあ？家の前にいんの？」

玄関に行つて扉を開けると、
確かに優弥がいた。
無理矢理入つて来て扉を閉めていた。

「り、慄！助かったあ・・・」

扉の向こうからは、

「おい！優弥、慄のところに逃げるのは
卑怯だぞ！」

「開けるー！罰ゲームは絶対だー！」
「慄、開けてよー！」

何なの？

來も冬夜も柚木も全員いるし・・・

「ちよつと優弥！なんなの？
罰ゲームってなに？」

意味わかんないし？
人が真面目に悩んでたつていうのに！

無意識のうちに殺気がでていたのか、
優弥がびくびくしている。

「ちょ！懺サーン？怖ッ！

話そう！話せばわかるって？」

話せばわかる・・・だって？

「じゃあ、來達からも聞こうかなあ？

1人から聞くより情報も集まるし？」

私を怒らせるのが悪い？

「いや・・・！駄目だって！」

拒絶する優弥を無視して、
扉を開けた。

すると來達が入ってきた。

「待ちなさい、來！

優弥は後でどうにでもできるでしょ？
まず・・・説明してもらおうかな？」

優弥に襲いかかる來達を止めて、
リビングへと連れて行った。

ソファーへ座らせてからキッチンへ行った

「んーと・・・お茶、ジュース、紅茶、
コーヒーのどれがいい？」

大体予想はつくけど・・・

來 「俺、コーヒー！」

優弥「ジュース！」

冬夜「俺もコーヒー」

柚木「いつものやつ！」

予想的中だけどさー・・・

「柚木・・・いつものって
ここファミレスじゃないんだから・・・
まあ、いいけどね。」

キッチンで準備していると優弥が来た。

「あのー・・・ごめんな？
いきなり押しかけてさ？」

そんな事きにしてたんだ？
今更なんだけど・・・

「んーん！いいよ別に？
はい！コーヒー2つとジュース！
持ってって！」

後はアレだけ、柚木のお氣に入り。

チョコを溶かして、冷たい牛乳混ぜる。
コップにいれて上に生クリームをのせる！

完成ー？

ソレをリビングに持ってく。

「はい、どーぞ。
今日は生クリーム入りだよ」

柚木に渡してから座って私も飲む。

「あれ？今日は懐もチョコなの？」

私の飲んでいるのを見ていう柚木。

「うん。チョコ溶かしすぎちゃって
余っちゃうし」

んーそれにしても甘いなあ・・・
結構おいしいかもっ！

なんか和むなあ・・・

「ってちがーう？和んでる場合じゃないっ
説明してってば！」

チツ・・・

舌打ちの音が聞こえた。

「誰？舌打ちしたのは。ざけんなよ？

さっさと説明しろや？

「こっちも忙しいんだっつーの！」

ビビりまくってるよ！

こんなのが桜花の幹部でいいのか？

「「「「「は、はいいい？」「」「」

「ゆるっし」

全員の説明と言いつきを聞いた後、
一発ずつ殴っておいた。

「なるほどね。話をまとめると、

罰ゲーム付で遊んでいたのに
優弥だけ罰ゲームをせず逃げたって事？」

別に遊びなんだから罰ゲームくらい
やればいいのに・・・

「あんな罰ゲームできるかー？
絶対イヤだ？」

なんなの？子供？この人ら・・・

「どんな罰ゲームなの？
私にできる事ある？手伝おつか？」

気になったし、

ここまで拒否ると可哀想だったから聞いてみた

すると、優弥は真っ赤で

みんなニヤニヤしだした・・・大丈夫？

「慄には・・・言わない。」

はい？意味わかんないし。

罰ゲームくらいいいじゃん教えてくれたって

まあ、あの手でいきますか！

「ねえ・・・いいでしょ？教えて？」

ひっさーっ！

うるうる瞳＋上目遣いっっ！

これすると男は大抵お願い聞くんだったて！

「「「「「・・・っ？ ￥￥ ￥￥ ￥￥」」」」」

あれえ？みんな黙っちゃったし・・・

「・・・告白。」

ん？告白？

「は？なに言って「慥に告白しろって言われた！」

・・・What？なんで私？

「あのー・・・告白って好きな人にするもんでしょ？

だから優弥の好きな人にしないとね？」

優弥は不機嫌、皆は大笑い
って違う??

「なんで笑うの？当り前の事言っただのに！」

そう言っていると柚木が近づいて来て、
私を膝にのせた。

「慥、怒らないで？」

俺は笑ってる方が好きだよ」

いつも同じ事言ってる。

”笑ってる方が好き”って言葉。

「知ってるよー？私も柚木大好きー」

笑ってそう言つと、

柚木は頷いてから優弥を見た。

「懐、優弥のスキと俺のスキは違うんだよ」

十八

んゝ．．．わけわかんない。
なにが違うんだろ??

いつてる事難しすぎるなあ．．．

「わかんないの?ま、仕方ないね」

柚木にわかんないの?って言われるとは．．！
ハイ。相変わらず可愛いですよ?
女の私が悲しくなるくらいに。

ん．．．．．てゆーかさ、なんか．．．．．

「ん?懔、眠いの?寝る?」

ほら、柚木は私の変化にいち早く気付く。
だから余計に気をつかせてしまう。

「．．．．．うん。寝る．．．

みんな泊まってっついていいよ……
「おやすみ」

そついい、ベッドに寝転んでから
すぐに意識を手放した――。

――次の日の学校で……

「はあ？ほんつとに覚えてないの？
柚木のばかぁー？？？」

教室で怒鳴ってるのは……
ええ、私ですとも。

教室の皆さんからの視線ガンガンありますけど！
そんな事よりも～～っ！

「え？は？ちよつ、懺なんで怒ってんの？
朝からずっと家でも怒ってたよね？
俺なんかした？」

なんもしてない奴にここまで怒るわけないでしょ！
ありえないんだけどっ！

私の．．．．私の．．．．

唇奪つといて？

読者の皆さんにわかるように説明すると．．．

――今朝

「．．．．ん、あ．．．れ動けない．．．？」

瞳をゆっくり開けると、
柚木の顔ドアップ

「ひゃあっ．．．．？」

ん？後ろも誰がいる．．．．
クルッと顔を向けると、優弥ドアップ

それよりこの4本の手はなに？

んもー？仕方ないなあっ．．．．

「柚木っ！柚木起きて？朝だよ」

まずは低血圧なこの方からね！
寝起き最悪なんだよね…………

「うにゅー…………慄？まだ…………ね…………むい」

うにゅーってなに？

えっ！可愛いつ！可愛すぎっ！

「だめ！ほら、お…………ん？」

頬をぺちぺち軽く叩く。

「煩いの…………慄が悪いんだからね？」

しこーてーし。

「え…………んっ！んう…………ふぁ…………ンッ…………」

キスされちゃいました。

私は一つ学びました。

低血圧男の寝起きに近付くな。

せめて、軽いほうがよかった……

は？あ、そうです。

ふっかゝい方されました。

「んーっ！俺久し振りにすつきり起きた！

ってあれ？懔どうかした？」

肩で息を整えてる私を見て、

きよんとした顔で聞いてくる。

「え？覚えて……ない………？

ざっけんなああ？？」

―――回想終了

ってな感じです。

これはさすがに怒るよね？

「っ私、棟達のとこ行ってくる？」

このままだと殴りそう。

アノ事の返事もしなきゃだし。

廊下に出て、棟達の教室に向かう。

でもやっぱりあの子は……………

「？待って！俺も行く？」

…………… 柚木はついてくるわけであって……………

言いあってる最中ですけど？

分かってるけど、

繋いでくる手を振り払えないのは

私の甘さ……………

「なんでついてくんの？」

教室に居ればいいでしょっ」

廊下でも言い合う私達。

「別にいいでしょ？懔と居たい??」

なにそれっ！言われるこっちが恥ずい？

「でも、柚木こないだ棟あんまり好きじゃないっていつてたじゃん！無理にあわせなくていいよ？」

棟達の教室の前まで来てたのにまだ言い続ける私達。

「なあ、お前らそれって喧嘩してんの？思いやってんの？どっちだよ」

教室の扉が開いて話しかけられた。

「「喧嘩？？」」

声の主の方を向いて答えた。
怒鳴り合ってるし……喧嘩だよね！

「って棟？そうそう、棟に用事あってこないだの件なんだけど」

棟を見て話すと、
その背中の中の後ろの席には……………

「……………楷。」

勿論、朱鳥やいつものメンバーも居た。

「ああ、あの事が。」

場所変えるか？朱鳥呼んでくる」

朱鳥を呼びにいかうとする棟の
ブレザーを引っ張って止めた。

「いい、ここで話す。」

こちらの返事はokよ。後は……………
あなた達次第。」

背伸びして、棟の耳元で

（楷、千津、諒には話してないでしょ？）
と言った。

棟は苦笑いして、ああと言った。

「じゃ、みなさんの視線痛いから戻るよ。

では、失礼いたしました。

海龍の総長さん」

そう言つて、來達のいる教室へ戻つた。

――慥が歸つてからの棟達

(棟side)

ほんとと仲良いなあの人、
言いいいの喧嘩が思いやりの言葉だった。

「慥からの返事はどうだった？」

すかさず朱鳥が聞いてくる。

「ああ、okだよ。

後は俺ら次第だつて言われたしな？」

この会話がわけわからないというように
楷、千津、諒がみている。

たしかに、その通りだな。

千津と諒はまだしも、楷がな……………

「は？慥がokつてなんの事だよ？

俺ら次第つて……………？」

千津が真っ先に聞いてきた。

まあ、そうだよな。

目の前でわけのわからない会話してるから。

「そうだな．．．．．屋上。行くか」

十九

――棟side

キィィ・・・・・・・・

屋上の扉を開けると風がふいた。
少し肌寒い。

「・・・・・・・・で、どういう事だ？」

朱鳥は知ってるみたいだけど」

全員が座ると、千津がきりだしてきた。

「ああ、お前らがどう思っているかは

わからないが、俺は懍ともいたい。

だから・・・・・・・・桜花に同盟を求めた」

言いきると、

千津も諒も楷も驚いた顔をしていたが
すぐ真剣な顔になった。

「そしたら、承諾された。
後は俺ら次第だつてさ」

俺の言葉に続いて朱鳥が話した。

「俺は大歓迎だ！！承諾したつて事はさ、
懔も俺らと居たいって思ってくれてる
つて事だろ？」

にこにこ笑つて千津が言う。

感謝するよ．．．千津

「だよな！懔とは争えねーよ！
懔の笑顔も嘘じゃねえし？」

その通りだ。諒。

懔の今の笑顔は嘘じゃない。

瞳にまだ闇があるけれど、
それを減らしたのはアイツら、
桜花の存在だろう。

「俺は．．．懔を．．．信じてみる」

楷は懐の涙を見てから変わった。

確実に動揺していた。

怒ったのも、俺らの事もあるだろうが
懐を仲間として見ていたんだろう。

「ん、ありがとう。」

じゃ、行くか？最強の姫のもとに」

そっいい、屋上を出た。

教室に戻って来てから、
来たちと話していると・・・・・・・・

ガラ・・・・・・・・

「桜花。こちらも了解した。

今日からよろしくな？」

私たちの横まで歩いて来て、
握手を求められた。

「ええ、よろしく。棟」

一緒にいてもいいと言われているようで
とても嬉しくなった。

桜花が大事なものは変わらないけれど、
棟達も大切だったから・・・・・・・・

周りから、

「なんで佐久間さんが？」とか

「桜花って来さん達だよな？」とか
言ってる声が聞こえる。

そっか、知らないんだ。私の事。

「桜花12代目総長、佐久間慥です。

以後おみしりおきを……………」

誰にでも聞こえる声で自己紹介
優しいネ。私。

「「「はあああああ？」「」「」

クラス中の皆さんの悲鳴。
うるさい……

棟達&来達は苦笑いー？

「慥らしいね？

俺の慥はこうでなくちゃ……………」

相変わらず私を膝に乗せて、

後ろから抱きしめてくる柚木。

でもね？、俺の、ってなによ．．．？

「あ、言い忘れてたけど

俺らもココのクラスになったから」

．．．．．？ココですか？

「ええええええ？でも！陸にいは？」

想像通りの反応だったのか、
満足気にわらって、

「勝手にしろだって。

だから勝手にさせてもらった」

自由すぎやしませんか？この学校。
陸にいが理事長だから仕方ないけどね

席が変わって、（棟達が居た人をどかして）

來 優 冬
柚 懨 棟
諒 楷 朱 千

こうなりましたあっ！

「なんで？俺めっちゃ寂しいじゃん？」

千津、ドンマイ・・・・・・・・！

それより、ね？

棟が教室入って来た時からなんだけど
楷の視線がイタイデス・・・・

なんでこんなに見られてんの？

楷は私の事嫌いになっちゃったのかな・・・
だとしたら結構シヨックかも・・・・

「懨・・・・・・・・」

ビクッ・・・・・・・・！

嫌われちゃったかもしれない楷に
いきなり呼ばれて吃驚しましたよ、ええ

「な、に？ 楷」

思わず俯くと、柚木が手を握った。
パツと顔をあげると、
にこつと柚木が笑った。
それだけで、安心できた。

「あの．．．．ごめんな？」

え．．．．．？
なんで楷が謝るの？

「どうしたの？ 謝らないでよ．．．．」

私が悪いんだから．．．．

「いや、俺も言い過ぎたから。
慄に嫌われたと思ったら、
なんか悲しくなったんだ．．．．．」

私の髪を撫でながら微笑んでいる。

「楷、私嫌いになつてないの？
私も楷嫌いじゃないよ？」

嫌われてないんだ？
よかったあ！

「懔、よかったね。」

私達のやり取りを見ていた柚木が
にっこり笑った。

「うんっ！」

だいぶ気分いいんだけど？
みんな一緒に居られるんだね！

――私は甘かった。

アイツがほっておくわけないのに。
私のせいで傷付く人増えてしまっているのに。

また、感情を捨てなければいけない時が
近付いていたのにな？

やはり私に感情必要なかったんだね？

ごめんな、みんな
.....

海龍と同盟を結んでから数週間たった
ある日の出来事だった。

毎日とっても楽しく過ごしていたんだ。
今日までは。そう、キョウマデ…………

最近は棟達も桜花の倉庫にきている。
今日もいつものように倉庫にいた。

「総長！総長宛の手紙が届いてます」

下っ端君がどうぞと行って渡してきた
手紙には差出人が書いていなかった。

誰だろう……………？

「ッ……………？な……………んで……………！？」

アイツか？

「柚木??きてツ・・・・・・・・?」

唯一アノ事を知っている柚木に手紙を見せた
読んでいくうちに顔が険しくなっていた。

私は・・・いや、私達は決して許さない。
大切な人を奪ったアイツを・・・淳紀を・・・

「なんで今!アイツには会わない??
会わせない?」

クシャツと手紙を握り潰して、
苦しそうな顔をしている柚木。

わかってる。わかってるよ。
だけど、アイツをほつとはいえない。
また被害者がでてしまう・・・

だから私は守るよ。
大切な人達を。仲間を。
たとえそれが私を傷付けても。

「・・・・・・・・どうした」

いつのまにか皆が私達を見てるし．．．
そりゃあ手紙見てこんな会話してんだから
不思議だよなー？

だけと言えないよ。

「いや、なんでもないよ棟」

にこつと笑つて誤魔化そうとした。
 そう。 ” した “ だけ。
 要するに 失敗。

「言え。後その手紙見せろ」

なんで命令なの……？
棟、ただけ俺サマなんだろう？

「嫌。まだ、言えない。」

「え？ちよっ．．．おいっ！
 懐どついう事だよ」

即答した私に何故か來が焦ってる。

「來？人の話聞いてた？

言えないの！巻き込むわけにはいかない」

ダレモワタシノセイデキズツカナイデ・・・

柚木は全て知っている。

その場に居たから。私と一緒に。

巻き込んでしまったから守るんだ。

絶対に・・・・・・・・・・

「ねえ、慄．．．？いなくならない？

約束．．．．．したよね？」

不安そうに柚木が私を見るのは、

“はずれの廃工場。今夜１人で来い。
すべての決着をつけたくばな．．．”

手紙にあった言葉。

私のお父さんは桜花の１０代目総長だった

お母さんはその姫だった。

不意打ちだったんだ．．．

殺された時既に引退していたのに。

「大丈夫だよ。

柚木を１人にしていなくならないから」

これは本音。アイツ等．．．蛇紀を潰して
必ず帰ってくる。

「・・・・・・・・たまには頼って？」

幸いアイツ等蝶姫の正体知らないし。
頼れないよ。迷惑をかけつづけたんだから。

「明日、2人でどこかに出かけよう？」

待ってて。あの場所で。

必ず行くから。」

思い出の公園。初めて会った公園で。
待っていて、必ず帰ってくるから。

「やっぱり行かしてはくれないね。

待ってるよ。ずっと、慄が来るまで。

慄、これだけは覚えておいて。

ひとりじゃないんだよ。」

ありがとう。柚木。みんな。

気付いてるんだよ？私。

みんな自由な事やってるけど、ほんとは
こっちの話も聞いているんでしょ？

「そろそろ．．．かな。
行ってくるよ、みんな。」

1人呟いて。

足音、気配を消して部屋をでた。

一筋の涙を落とし、目的地に向かった。

「着いた・・・・・・・・」

廃工場の中へ足を進めていく。

1つの扉に辿り着いた。

ばあああんっ！

それを壊して進む。

「蛇紀・・・・・・・・潰す!!!!!!」

総勢400人位だろう。

その中心にいる、最も憎む相手。

「あれー？ほんとに1人で来たんだあ？

凄いなあ。この人数、1人で出来るか？」

暗闇の中、一羽の輝く蝶。

「無理だよなア？ギヤハハッ？」

その美しさに誰もが魅了され――

「怖じけづいたかア？」

――力強さに圧倒される。

「チッ？無視かよ！！！！やっちまえ！！！！」

――今宵も蝶が舞う。

ドガッ

バキッ

ガッッ

「後は貴方だけよ？総長さん」

15分程で片付いてしまった。

1人1人が弱すぎる。

名ばかり大きくなってしまった哀れな族。

「私の前に、二度と現れるな」

ドスツッ！！！！

「サヨナラ。」

外に出て、空を見上げた。

「綺麗……………」

たくさんの星が夜空に浮かんでる。

「……………いつまで隠れてるの？出て来なさい」

分かってたよ。着いて来てた事。
気付いてたけど、ほかつといた。

着いてくる事くらいわかってたから。

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

來、柚木、優弥、冬夜、
棟、朱鳥、千津、楷、諒。

「なんで来ちやうの？」

待っててって言ったのに。」

ぎゅっ・・・・・・・・

「ん？どうしたの？珍しいね。」

あなたが抱きついてくるなんて
ねえ、棟」

心地いい、シトラスの香り。

「心配したんだぞ・・・・・・・・
勝手にいなくなんな・・」

クス．．．．．

「大丈夫だよ。

柚木、明日2人じゃなくて皆に変更。
ちゃんと待ってなかった罰」

蛇紀は弱い。

ただ心配だったのは銃。
所持しててもおかしくなかったから．．．

「えゝゝっ！

2人でお出かけできると思っただのに！！！」

顔はわらってるよ？柚木。

「残念だったね。

ただいま、みんな」

私には、

「「「「「懐、おかえり！！！！」」」」」

帰る場所があるんだ――――

二十四

「ねえ、どこ向かってるの？」

今日は約束の日。

今は車の中でどこかに向かってる。
私だけどこに行くか知らない。

「着いたよ」

朱鳥の声で車から出ると、
そこは、

「ショッピングモール……？」

なぜかショッピングモール。

「せや！もうすぐ夏休みやろ？」

その間に3泊4日くらいで海行こう思ってたん。
今日はその為の買出しや」

泊り！？皆で海行くの！？

「じゃあ、水着欲しい・・・」

そう呟くとどこからか、

店員さんがたくさん水着を持ってきた。

「俺らを選んだやつを着てもらおうよ！！
なあ！！いいだろ、慄」

そんなに目をキラキラさせてお願いされたら

「来、いーよ」

ってゆーしかないじゃんかああ！！

「よっしゃあ！！勝負だつ！！！！！！」

しよ、勝負！？

「水着が慍に選ばれた奴の勝ち!! いいな」

「『上等だ!!』」

喧嘩するわけじゃないんだから・・・

数分後――――

「慍、選んで!!」

前に並べられた数着の水着。

誰が選んだか分かんなくなってる。

うん、この露出がヤバイやつ千津でしょ。

一つの水着に目がとまった。

「・・・・・・これ」

上はビキニで左胸に2羽の蝶。

下は短いスカートがついている。

黒を基調としたデザイン。

「「「ああああ」」」

そんなに落胆しないでよ．．．．
罪悪感が芽生える。

「これ、誰が選んだの？」

「俺だ」

．．．．．煉。

煉が朱鳥が冬夜らへんだとは思ってた。
でもさ、煉が選んでるとは思わなかった。

「懐、悩んでたよね？どれと悩んだの？」

そうも一つ候補はあった。

それは黒の下地に色んなところに桜が
散りばめられていもの。

「これ」

指差すと柚木の顔が明るくなった。
とゆーことは、

「それ、俺の！！」

そういつてぎゅっと抱きついてきた。
そのまま頭をなでなでしていると、

「離れろ」

煉が引き剥がしてきた。
なによー・・・いいじゃんっ別に。
煉は不機嫌だし
他の皆はニヤニヤしてるし・・・

「ありゃー、そーゆーこと？奥様」

「そうなのよ、うちの息子ませちゃって」

「誰でもあるものですわよ奥様」

「そうですわよね」

「」「おほほほほ」

來と千津の小劇開催された。

「わー、馬鹿が2人いる」

優弥が呟いた。

副総長、馬鹿呼ばわりされてますよ!!

「「だ、誰が馬鹿だ!!」」

「「「お前ら」「」」

即答されていじけはじめた馬鹿2名。
その間にも着々と買い物は進んでる。

「馬鹿共歩いて帰りますか？」

嫌ならさっさと着いてきて下さい」

大魔王朱鳥様降臨!!!!!!!!
こえーよ!! 笑顔が真っ黒だよ!?

「「はいいい!!」」

朱鳥最強・・・いや、最恐。

「夏休み中に喧嘩は構わない。

でも警察沙汰にすんじゃねーぞ!」

奏の掛け声(?)がかかると、
教室からみんな出ていった。

「「夏休みー!!!!!!」」

いました。ここにも馬鹿共が。
お察しの通り馬鹿副総長と阿呆関西人。

「.....うるせえ」

煉は不機嫌だし?てかなんで??
夏休みって嬉しいもんでしょ。

「ああ、そーゆー事。

じゃあ桜花の倉庫に来ればいい。
そうすればいつでも会える」

あ、久しぶりの冬夜だあ。

出番少ないよねー。

(ごめんね!!冬夜!!by作者)

「チツ・・・」

煉、なんで舌打ち!?

てか誰に会いたいのか?桜花の下っ端?
凄いな、仲間思いだねえ!!

「懔、煉が会いたいの」

桜花の下っ端じゃないからな」

・・・違っらしいです。

「ええっ?じゃあ誰?」

「ん?それは「知らなくていい」

むう・・・なんでよ・・・

私だけ仲間外れみたいじゃん！！

「おしえ「知らなくていい」

「おし「襲うぞ」

「．．．．．」

ケチ。煉の阿呆。馬鹿。

言葉には出せないので、
心の中で悪態をつきまくる。

來達も笑わないでよね！！！！
朱鳥と冬夜だつて笑い堪えてても
肩が震えてるし！！

「柚木．．．」

フラフラと柚木に歩みよると椅子から立った。
手を繋いで教室から出ようとした。

「懐、今日は甘えん坊だねー

嬉しいけどね、煉が怖いよ？」

「煉なんかほつといていーの!! 帰ろ?」

教室を出て廊下を歩いていると
後ろからばたばたと走ってくる音が聞こえた

「「「「「りいいんー!!!!!!」」」」」

「...うるさっ

「呼ばれてるよ?」

「知らなっ!?!」

知らないと言おうとすると、
後ろに引き寄せられた。

「逃げてんじゃねーよ」

気付くと煉の腕の中にいた。

「ふえ!?! なっ!?!?! 離してっ」

鳩尾に一発お見舞いして力が緩んだ隙に
抜け出して、柚木の後ろに逃げた。

「つてえ．．．．」

うん。知ってる。

100%の力ではないけど力いれたから。

「ちょ．．．懔、手加減しないと．．．」

したもん！！！！

「ん？煉なぜうずくまってるんです？」

追いついたらしい朱鳥が聞いてきた。
それには苦笑いで返しておいたけど。

「馬鹿が殴りやがった．．．．」

馬鹿とはなによ．．．馬鹿とは．．．．

「へえ、そうですか。」

「懔はなんで隠れてるんでしょう？」

「変態馬鹿総長から逃げるため」

「煉の事ですか・・・。」

「「海だー！！！！」」

そうなんです、海っ！！！！

あ、叫んだのは千津、來、私ですっ

そして今、私は煉のバイクに乗ってます。
後ろね？前はもちろん煉。

「キレーだね！！」

「・・・・・・・・。」

「聞こえてんでしょ？」

「・・・・・・・・。」

「れーんー！！！！」

「・・・・・・・・るせえ」

散々無視しといてそれ！？酷くない？？
バイクだって仕方なく乗ったのに！！

あーあ自分のに乗りたかったあー…………

隣を走っている車を覗くと、

それはまあ優雅に朱鳥と冬夜が

紅茶飲んでますよ！！

「なにあの優雅な人達…………

海に来てんのに紅茶飲んでるよ…………」

朱鳥のバイクは修理中で

冬夜はバイクに乗らない。てかもってない。

少し経つとバイクが止まった。

「降りろ」

「はい」

うわー注目集めてんね。

まあ？No.1とNo.2の上が全員揃ってるし？

当たり前っちゃん当たり前だけど。

「あの女誰！？うざっ」

「馬鹿っ！！あの人は桜花の総長よ！！！！」

「うつそ!!!!総長!?!かつこいー」

.....。態度変わりすぎ。

てゆーか学校で発表したから

色んなところで広まっちゃったんだゝ.....

ま、別にいいけどね。

「水着に着替えよーよ!

懔の水着姿早く見たいなっ」

いや.....ね? 諒くん.....スタイルよくないし。
あんま期待しないでよ?

「うん。着替えたらここ来るから。

ここにいてね」

そう言って更衣室っぽいところへむかった。

二十七

水着の上にパーカーを羽織って、
さっきの場所に戻って来た。

．．．．．皆さん囲まれてますけど。

「煉様あゝ私と遊びましょうよお」

「来くうーん」

私にはあんな恐ろしい所に入る勇氣は
持ち合わせていません。

明らかに怯えてる人一名はっけーん！！

「うわー．．．楷大丈夫かな？」

ほんとにねえ．．．

朱鳥達が触らせない様にしてるけど．．．
あれはヤバイよ．．．って、ん！？

「ゆ、柚木!？」

影からこっそり出てきた柚木。

「あんなところに堂々と立ってれば女が
よって来るに決まってるでしょ？」

「……だから隠れてたわけですか。」

「んーでも来と千津はいいんじゃない？」

危険なのは楷と冬夜と優弥かな。

まあ優弥は女慣れしてないだけだけど」

何気に冬夜も女嫌いなんだよねー。
楷ほどではないけれど。
でも初めて会った時は楷以上だね。

「懐、どうするの？助けるー?？」

もう一度あの集団を見ると……………
うん、大丈夫そう。

「いや、もう終わるよ。待ってよっか」

眺めていると案の定すぐ終った。

煉が「失せろ」って言ったただけなんだけどね。

「お帰り。お疲れ様でした」

慰めの声をかけると何かが抱きついた。

「懔．．．助けてよ．．．．．」

楷くんでした。

どうやら相当疲れたようです。

「ごめんね、あの女の人達怖いんだもん」

私の隣に座ったのはどうやら冬夜らしい。
大丈夫かな？ 顔色悪そうだけど．．．

「冬夜、だいじょーぶ？」

俯いている顔を覗き込んで聞くと、
今度は赤くなつた。

「だつ大丈夫だから!!」

熱中症かなあ？

ただでさえ暑いのにあの集団に囲まれたしね・

「懔、可哀想だからやめてあげて。

とりあえず煉の所行っといでよ」

え、なにが可哀想なのか教えてくれよ柚木。
まあいいや。煉の所行こう。

「・・・・・・・・・・。」

行くまでもなかったようです。

恐らく私を抱き締めてるのは煉でしょ？

「懔・・・・・・・・、ナニあの女共」

んーなんか最近煉に抱きしめられるの

多い様な気がする．．．．．

「とりあえず離してくれるかな？」

「嫌」

即答だよこの男！！！！
マジ俺様！！！！！！

「懐はなんか抱き心地がいい」

いや、そんな事言われても．．．．．。
着てるモノ薄いから体温が感じて
ドキドキするんだよー！！

「ひゃあ．．．．．っん」

首筋を舐められて耳たぶを甘噛みされた。

「ココ、弱いんだ？」

首筋、背中と舌を這わす煉。

必死に声を抑えて涙目になる。

「フツ冗談だ。バーカ」

ぽんつと頭に手を置いて煉は朱鳥達の所へ行った。

二十八

「なによ．．．アイツ．．．」

てゆーか私海どうするよ。

髪の色が．．．スプレー落ちちゃう．．．

「懺？海、入らないの？」

優弥、入らないんじゃないかと
入れないんですよ．．．

「髪、スプレー落ちちゃう」

あー！って感じの顔になった。

「んーどうしようね。入りたい？」

そりゃそうでしょ。

頷くとキョロキョロして、

「よし！！着いてきて」

疑問に思いながら着いてくと
岩に囲まれて人のいない所に来た。

「ここなら入れるよ。」

スプレー持って来てるし」

さすが、用意周到。

「ありがとう！！」

海に入るとやっぱり気持ちいい。

泳ぐのは好きだからなあ…………

「見張つとくから上がったらスプレーしてね」

なんだかんだで桜花は常人多いかも…………
煉達に比べれば。

「二人で何やってるの？」

しばらく泳いだと優弥のいる方から
声が聞こえた。

「んー俺は見張り？」

「懨どこ？」

「秘密っていったら？」

「強行突破」

あ、分かった。柚木だ。

「わ、分かったって奥で泳いでる」

「へえ．．．行くからどいて」

退かなくても強行突破でしょ．．．．？

「え、でも．．．まあ柚木だしっか」

この人に見張りは任せちゃ駄目だね。
今の場合はいいんだけど。

「りーんっ・・・あ、髪・・・」

海面に顔をだすと髪に反応したところをみると

「やっぱり落ちてる?」

カラコンも海水だしとってあるから
瞳も水色。

「うん。俺はこっちの色が好きだよ」

濡れた髪を撫でながら柚木が言った。

「私も両方気に入ってるけどこっちが好き」

小さい頃は気持ち悪がられたけど
お母さんとお父さんは綺麗って言ってくれた
この色・・・

「ねえ後ろから物凄く視線感じる」

苦笑いしながら言うぐらいだから
だいぶ視線を送ってるんだろっね・・・
優弥が。

「ふふっそろそろ戻ろうか」

上がって髪を少し乾かしスプレーをした。
これで蝶姫の姿はない。

「優弥ありがと。戻ろうか」

お腹も減ったし、そろそろ昼食かな。

「あー！！！！いたっ！！三人共どこ行ってたの！！」

パラソルに戻ると諒が叫んで
視線が集まった。

「や、ちょっと泳ぎに．．．ね」

．．．．．引くよ。

その迫力、可愛いから怖くないけど。

「お昼どうします？何か食べたい物とか」

あの一朱鳥さん？後ろのはナニ．．．．？

「えっと．．．それは．．．．．？」

ソレを指差すと朱鳥が困った様に見た。
だって気になるでしょ．．．．ドス黒い．．．モノ

「コレは．．．楷です」

え？楷だよね貝じゃないよね？
人間だよね？

「女がうじゃ．．．ワラワラ寄ってくるから
こうなっちゃって．．．」

あの、冬夜さん？貴方今うじゃうじゃって
言いかけたよね？

「最高だったぜ！！」

「そうそう！！おねーさんがいっぱい！！」

うわ、こっちはこっちで嫌かも．．．
この馬鹿二人組こと千津と來。
キッラキラしてて暑苦しい．．．

「地獄だ！！！！慄つなんで離れてったんだよ．．．」

あの楷くん。私がいても寄ってくるでしょ？
怖いメイクのお姉さん方に近寄るなんて．．．

．．．．．恐ろしい！！

「安藤（柚木）ばかりズルい．．．」

柚木鼻肩してるつもりはないけどなあ．．．

「え、俺は？俺も居ただけど」

「御堂はどうせ相手してもらってないだろ」

優弥．．．そんならいでへこたれるな．．．
相手してないつもりもないし。

「慥、それはほかつといてコレ相手して。
さつきから不機嫌なんです．．．」

朱鳥も大変だね、煉が不機嫌だと面倒でしょ。
絶対。

「煉、どした？」

「お前．．．なんで遠く行つた」

質問する時はハテナつけよーよ．．．
まあそんなこと口に出さないし、
それより理由．．．蝶姫だからとか言えないし．．．

「人が少ない方が落ち着くんだよね」

嘘を付く。

ズキツと胸が痛むけどまだ、言えない。

．．．．．多分完全に信用してるわけではないから。

「そうか．．．」

府に落ちない様子だけど気付かないフリをした。

．．．．．ほら、私はまだ弱い。

嘘について自分も相手も傷付ける。

二十九

海から帰って一ヶ月過ぎ、
学校も始まった今日。

私はある情報について調べていた――

「槐雨……ふざけんな……」

最近、一気に勢力を高めて全国No.1を
狙っているらしい。

傘下がかなりいて一人一人は雑魚だけど
人数が多い。

「潰させるわけないじゃん？」

ニヤリと笑い情報をハッキングする。

今日は風邪と言って学校を休んだ。

パタン

パソコンを閉じて息をはいた。

「今夜のシヨールはPM5時開幕。

さて、どれくらいヒトがでるのかな」

槐雨の強さなんてどうって事ない。

人数でどれくらい楽しませてくれる？

さあ、シヨールの準備だ。

向かったのは海龍、

煉達の倉庫――

バンッ

「こんにちは。海龍のみなさん

煉いる？」

煉達は今日、暴走すると言っていた。

でも今夜外に出られちゃ困るんだよね。

「あ”あ”？てめえここが・・・ッ懐さん！！！！？」

その男の声が倉庫に響き、
周りの下っ端達が騒ぎだした。
そりゃそうだ。風邪と言って休んだ人が
今、目の前にいるんだから。

「「「「「慄っ」「」「」「」

幹部室にも聞こえたのか皆出てきた。

「あはっこんにちは」

ふざけてそういうと皆止まった。

「あれ？こんばんは？？」

「慄、なんでここに？」

おお、煉が語尾にハテナをつけた！！
ってこんな事してる暇ないんだよ。

「今日の暴走、止めてくれない？」

「無理」

．．．．仕方ないな。

「んじゃあ、煉。バイバイ」

煉の後ろに回って手刀を落とした。
フラッと倒れてきたから受け止めて、
朱鳥に渡した。

「懔、なんのつもりです？」

「暴走されると困るんだよね。」

あ、ヤバ。じゃね」

後ろから罵声が聞こえるけど
そんなん気にしてられない。

海龍に行つた4日後

桜花、來に電話を掛けた。

「あ、來？今から桜花も傘下全員倉庫から出るな。これ、総長命令」

《はあ！？お前なに言つてんの！！？》

「じゃ、バイバイ」

《ちよつ懨！！》

無理矢理電話を切つて槐雨の倉庫へ向かった。ここから行けば7時には着く。

――

もしもの為に煉と來にこの場所と、
ショーの始まる時間をメールで送った。
どうせ、大人しくしてないだろうし。

「さあって行きますか」

Bannon

ドアを蹴破った。

「こんにちは。 槐雨の皆サン」

「つてめえ！！桜花の総長さんじゃねえか。
俺らになんか用か」

目の前には500程の男の大群。
キモッ・・・！！

「ええ。 槐雨、潰そうと思って」

「1人で？わらわせんな！！てめえら殺れ！！」

その男達が一斉にかかってきた。

「Let's show time」

鉄パイプやらなんやら持っていて
戦いずらいが弱い。

でもこの人数ではなかなか減らない。

30分程たった時、立っているのは
ボロボロな私とボロボロな槐雨総長。
やはり女の体力には限界がある。

「……………うわああ！！！」

大声をだして殴り掛かってきた総長を
抑えて顔を殴った。

その時、爆音が聞こえた。

「……………慄ッ」

あはは、もう終わっちゃったし。

「遅．．．い．．．．．っつの．．．」

フツとそこで膝から崩れ落ちた。

そこで暖かい、愛しい香りがした――

――

――

――

來side

l p p p

倉庫で雑誌をよんでいると携帯が鳴った。

《あ、来？今から桜花も傘下全員倉庫から出るな。これ、総長命令》

「はあ！？お前なに言ってるの！！？」

《んじゃ、バイバイ》

「ちよつ懨！！」

プツーツー

あいつ何考えてんだよ！！！！！！
いつもなら一番に冬夜に伝えるのに、
今日はちゃんと副総長の俺にきた。

なんか、おかしい。

「ねえ今の懨なんでしょ？
どうしたの？？」

コイツ。柚木が知らないのもおかしい。

「傘下も幹部も全員外に出るなって・・・」

懨が嘘までついて学校を休んだのは
分かってる。

でも、それだけじゃない気がする・・・

l p p p

また、俺の携帯が鳴った。

「もしもし？」

《慄、いるか？》

「いないけど。どうした？煉」

《あいつ携帯出ねえんだけど》

それは俺も同じだ。

「知らね。さっき電話きたけど」

《4日前に倉庫来て暴走止めろって

言いに来たんだよ。俺を気絶させてまで》

「・・・慄、4日前から・・・っとメールきた」

《俺もメール・・・切る》

新着メールの内容に驚愕する事になる。

「ッ．．．おい！！今すぐ槐雨の倉庫行くぞ！！」

「「はっ！？」」

「もちろん」

流石、冬夜もその情報を見つけたらしい。

現在時刻は7：00

槐雨の倉庫に行くには30分かかる。

「飛ばせよ！！」

信号なんか全て無視して速さだつて
尋常じゃない。

でも、慄が危ない――

「つてめえん所の総長は人を頼れねえのか」

すぐ横に煉達、海龍がきた。

「知らねえよっ今はそれどころじゃねえ」

――

――

――

「．．．．ん．．．」

眼を覚ますとそこは白い天井、
右手に温もり。

「柚木．．．．」

そのふわふわの髪を撫でると
眼を覚ました。

私を視界にいれるとぼろぼろ泣きだした。

「懔ッ．．．懔、り、ん．．．」

ぎゅっと抱きついてくるから
髪を撫で続けた。

「ん。おはよー」

ガラッ

「「「「「」」」」」」

「あ．．．」 諒

「り、ん？」 楷

「え？」 優弥

「りいん！！！！」 千津

あのさ、マジ怖いんですけど。
來と冬夜と煉と朱鳥。
無言止めてくれない？

「痛っ」

何故か煉に叩かれた柚木。
やめてよー私の柚木にー！！

「ちょっと柚木叩かないでよっ
ありえな・・・」

「ありえねえのはてめえだ懺」

ギロリと睨まれて何も言えなくなった。

「何故あの日暴走を止めた？」

いきなりの質問に一瞬なんの事が
分からなかったけど理解した。

「煉達の暴走のルートが漏れてた。

いや、漏らされてた。槐雨に。

暴走の途中に警察に囲まれる様に
槐雨が警察に流したって感じ？」

考えたくなかった、最悪の方法で。

「じゃあ俺の所為、ですか・・・？」

情報の管理不足・・・朱鳥の所為じゃない。

「傘下に槐雨のスパイがいた。

あは、ごめんね。潰しちゃった」

蝶姫として。

「緋雷ですね？でもあそこは蝶姫が．．．」

そこまで情報出てきてるならわかるでしょ？
蝶姫が誰なのか。

「そう“蝶姫”が潰した。薬中もいたし」

にこりと笑いながら言うと、
眼を見開いた。

「ッじゃあ、蝶姫は慄ー？」

コンコン

「佐久間さーん面会時間終わりです」

返事をしようとした所で看護婦さんがきた。

「はい。じゃあね、バイバイ」

柚木と楷が離れようとしなかったけど無理矢理剥がして帰らした。

静かになった病室に一人は寂しい。

「煉、出てきてよ。いるんでしょ？」

病室のドアの方へ話しかけると静かに開いた。

「お前、止めてくれよ。無茶すんな」

ああ、これだ。意識を失う時にした、愛しい香り。煉だったんだ。

「えへへごめんね」

抱きしめる力がさらに強まって、

「お前だけは失いたくない・・・

懔、好きだ――」

どうやら私は頭がおかしくなったらしい。

「・・・・・・え？幻聴？」

煉が私を好き？

「違え・・・お前だけを愛してる」

もう、涙腺崩壊です・・・

「泣くなよ」

もう何言われても泣いちゃうって・・・

「煉、好き。大好き……んっ……」

「……ふっ……れ、ん……う」

甘い、甘いキスが降ってきましたー

「海の続き………していい？」

甘い言葉と共に。

「だ、駄目ッ」

三十一

「うわああああ!!!!」

「ッえ!? な、何事!？」

いきなり聞こえた叫び声での起床。
最悪の目覚めデス……

「ななななでれ、煉がおるねん!!」

え、煉? ?

「昨日いないと思ったら……
ここにいたんですか」

ココつてどこ? !

「煉がなんで懐と寝てるの!？」

煉？寝てる・・・？

「うつせえ・・・てめえらなんでいんだよ」

耳元から声聞こえるんだけど・・・
てゆーか息がかかってるしッ・・・

「懔のお見舞い」

楷助けてえええ！！！！
私、耳弱いんですー！！
耳にフーってやられると死ぬ！！！！

「いらん」

なんで煉が決めてんだよ！！
そんな事より離してえええ！！！！
腰にある煉の腕が太ももらへん
撫でてるの気のせいですか！？

つーか耳元で喋らないでえッ

「っれ、ん．．．！！耳ヤダ、手も．．あ」

変な声でるじゃん！！

喋るのもやつとだし．．っ

「何が？」

楽しんでるよコイツ！！！！

悪魔の笑み浮かべてるよ！！！！

「~~~~ツ．．／／／／」

．．あれ？千津の顔真っ赤なんだけど。
まさかの意外な純情boy！？

「ちやうわ！！俺は純情やないっ」

新事実発覚。女たらしだと思っていた
千津くんはただの純情boyでした。

「千津、懺は俺の女だから手だすなよ」

改めて言われると恥ずかしいね、うん。

「はいはい分かっってますうゝって
ええええ!!!!?」

「やっとくつつきましたね」

「えゝ．．．慄ゝ．．．」

「．．．慄、ほんと．．．．．?」

うううつ楳が可愛いっ
諒より可愛くみえる．．．!!

「ん、ほんと」

煉の呪縛からとかれて自由の身になった
から楳を撫でながら言った。

「そっか」

楷と諒を足して2で割ったら柚木になりそう。
だから楷はこんなにも安心するのもかも。

「今、何考えてる？」

突然の声を誰のものかも確かめずに
答えた。

「柚木に会いたいなあつて」

ハッや、ヤバイ……

「へえ、安藤？」

まさかのまさかで俺様魔王様総長様降臨！！

「え、えーと……ね？柚木は、その……」

ガラ

「懨」

な、なんてタイミング！

「お前の大好きな安藤が来たぞ」

嫌味だろうけど“大好き” っての間違つてないし。
実際、大好きだし！！！！キスされたけど！？

「え？何？？煉に敵視されてる？」

うん、可愛いよ柚木。

「來達は一緒じゃないの？」

煉は不機嫌だけど本物の柚木の登場に
少しテンションあがる。

「うん。 來と冬夜は下っ端とか傘下に
懨の入院を伝えてて忙しくて、

優弥は・・・まあ、ね？」

え、ね？って言われてもどうしようもない
んだけど。

まあ可愛いから許そう。

「でもよかったね」

いきなりですね。

「煉と付き合ってるんでしょ？」

・・・！！？何故にわかる！！言っていないよね？？
凄いな、勘が冴えてんね。

「・・・煉も大変だね」

「あ？分かってんなら離れろや」

煉くん！！口調がヤーさんだよ！！

「それは無理かなあだって俺と懺だしね。
懺のファーストキス俺らしいよ」

何！？どういう意味！？俺と懺って何！？
てゆーかキスの事覚えてたの！！？
確かにファーストキスだったけど
ここで暴露するなよおお！！

「・・・あ”？」

ギャー！！！！！！！！魔王様再び！！！！

「んう・・・ふ、あ・・・」

って何ー！！！！魔王様の綺麗な顔ドアップで
唇に温かくて柔らかい感触がー！！

「な、ななな・・・！！！！／／／／／」

ありえない！！みんないる前でキスする！？

「こいつは俺の物。お前は別の探せ」

物って何！！！！人だし！！にんげん！！

「あははっ 懨を奪おうとかじゃないよ？
ただ俺のお姫サマは懨だけだよ」

ちゅ、とほっぺにキスして病室からでてった。
煉に何かを囁いてから。

「んじゃ俺たちも帰るか」

「そうですね」

「懨ばいばい」

「……………またな」

ピシャ

「懨、安藤がファーストキスの相手って
本当か」

みんな帰った瞬間ベッドに押し倒された
懐ちゃんです。

「本当、です」

嘘ついたら危険そうなので、正直に。

「デープだつてな」

煉さん最近よく喋るね。
無口キャラ崩壊してるよね。

「ッ／／／／」

思い出させないでよ。
アレ真面目に窒息寸前だったからね！？

「．．．．。」

って何してるの！？

煉の手が裾を捲り上げようとしてるんだけど!!

「やだっ・・・何したいの?!」

抵抗しても男の力には勝てなくて、
下着があらわになった。

「煉っっ／＼／＼」

ブラまで取ろうとするのには
全力で抵抗した。
でもやっぱり勝てなくて・・・

「やだぁ・・・も、恥ずかしいッ」

手も抑えられて足も動かせなくて
ただ見られてる羞恥に耐えるしかない・・・

「チッ・・・」

舌打ちしたと思えば顔が近づいて来た。

「あんツ．．．ヤ．．あ．．．れ、んツ」

こんな事無理矢理やる煉が怖くて
涙がでてきた。

「あ．．．ごめん．．．」

涙を見て煉の眼が揺れた。

「ごめん、懺ごめんな」

服を元に戻してギュツと抱きしめられた。
いつもの煉と落ち着く香りに
涙が止まった。

「ん．．．あのね煉が嫌なわけじゃないよ？
いつかは起こる事でしょ？
急すぎてちょっと怖かったんだ」

煉の何も映してない瞳が怖かった。

「ごめん。安藤の言葉が本当だったから
アイツとそういう関係になった事が
あるかもって思った」

柚木？

「懐の左胸に黒子が一つあるんだよ”
って言って行きやがった」

あのさ、なんでそんな事知ってたの？
いくら小さい頃お風呂とか入ってるからって
なんで覚えてんのおおお！！！！

「なんで！？ねえ、春！！なぜ！？」

「ちよっ落ち着けよ懔！！」

「落ち着いとるわああ！！」

荒れてます。佐久間懔、荒れてます。
だつてさ！！酷いんだよ！！？

「なんで総長が幹部室追い出されるの！？」

煉達みんなして入れてくんなかった！！
柚木までもがだよ！！？

「や、俺に聞かれても・・・」

んでこのキョドってるのは春。

下っ端くんで一番仲良い奴。

「いいもん！！アイツ呼んじゃうから！！」

「ええ！？アイツって誰！！？」

つて事で電話

「萩ちゃん！！柚木達酷いんだよっ
んでね、めつつちゃ暇なの！！
だから桜花の倉庫に来て！！」

《え、ゆずが酷い？まあいいや。
丁度近くにいるからすぐ行くよ》

「ほんと！？萩ちゃん大好きー！！」

《ありがと。あ、もう見えてきた》

「早いね」

《うん、車だからね。出てきてくれる?》

「うん!!じゃ切るね」

プツッ

「えっ・・・と・・・り、ん?」

萩ちゃん優しい!!どっかの誰かさん達とは
大違い!!

「あ、行かなきゃ」

春の声は無視して、外にGO!!

「萩ちゃんっ!!」

外に出ると何やら楽しそうに門番さんと
雑談中。

「あ、懐久しぶりだね」

「うん!!」

「総長、お疲れ様です!!」

門番さん空気読もうよ。

礼儀正しい事はいい事だし怒らないけど。

「懐、最近本家には全然来てないね」

本家・・・世界Topの佐久間組。

「ん。でも仕事はしてるからいいでしょ?」

萩ちゃんは佐久間組でも上の人間で、
私の執事的存在。

「まあね。中はいっていい?」

「いーよ!!」

萩ちゃんは桜花のみんなと知り合い。
だからさっきの門番さんともね。

「懐ー！！！！勝手にどこか行くなよお・・・、
俺が煉さん達・・・に・・・？どちらさん？」

あ、そつか。春は桜花の下っ端じゃないしね。
海龍、煉の方の下っ端だから知らないか。

「あのねえーこの人は・・・ってあれ？」

「萩さんお久しぶりです！！」

「また喧嘩教えてください！！」

「萩さんっ・・・・・・・・」

桜花の下っ端に囲まれてる。

「もー！！私の萩ちゃんとなあーっ」

「総長相変わらずですねー」

「俺らにも貸してくださいよ」

暇だったから呼んだのに無意味じゃん!!

「――・・・慄」

煩い倉庫内でもはつきり聞こえた声。
その声に反応してそっちをみた。

「煉っ!!」

暇すぎて、寂しすぎたから煉に抱きついた。

「あれ、誰だ」

「萩ちゃんだよ!!暇だったから呼んだの」

煉は俺様総長様だけどなんだかんだいって
優しいし甘い。

だって今も撫でてくれるし。

「俺がいない間に浮気か？」

「ち、違うよ!!」

「お前の周り男多すぎ・・・」

でも私が恋愛の好きは煉ただけだもん!!

「・・・っ／／／知ってる」

「えっ・・・声にでてっん・・・」

煉ってキス魔だよね？

「あんま可愛い事いうと襲うぞ」

か、可愛いって・・・!!!？

「襲えないよー」

「．．．ちよつと来い」

来いっていつてるけど腕引っ張ってるでしょ！！

ボタン．．．カチャ

．．．え？

鍵、閉めた．．．？

「煉．．．？なんで鍵閉めるの？」

ここは倉庫の奥の仮眠室。

「俺結構頑張ってたよ」

何を??

「お前をこーしたいって」

「っれ、ん？」

いつもと違う煉。

ベットに押し倒されてる。

「ど、したの？？」

「喧嘩強くても男と女の力じゃ結局

こういう場面では女が負ける」

たしかに、私の方が強いはずなのに・・・
私の腕を抑える力を振り払えない。

「んっ・・・ちょ、ッふ・・・煉っー・・・」

「分かった？いつでも襲えるって事」

キスされて駄目だと思った瞬間離れた。

「うん．．．でも煉ならいいもん．．．」

「ッ煽んなよ馬鹿慄．．．」

煽ってないもん！！！！本音だし！！

「れーんー！！！！りーんー！！！！」

やばっ．．．

「煉っ．．．みんな来ちゃうよっ」

「鍵掛かってる．．．」

「でもっ．．．「黙れ」んんッ．．．」

意識が朦朧としてきた．．．

ガチャガチャッ

「煉ー！！ここだろ！？開けろー！！」

「懔々放置しないから戻っておいで」

優弥と柚木・・・

「ゆ、ずき・・・ふッ」

「この状況で他の男の名前呼ぶな」

ばあん！！

「懔ッ！！」

ぐわっ・・・し、死ぬ・・・

「大丈夫！？襲われてない？」

「しゅ・・・ちゃ・・・苦し・・・」

萩ちゃん！！！！苦しいよ！！！！窒息！！！！

「萩さん、離さないと慄が死ぬよ？」

ゆ、柚木．．．！！助けてくれるのは柚木だけだよ！！
これで放置した事許してあげる！！

「あ．．．ごめんね、慄」

目一杯酸素を吸った。

「んー大丈夫だよ」

「萩さん昨日ぶりだね」

柚木が萩“さん”って呼ぶのは実は柚木も
佐久間組の組員だから。私の相棒的な

「柚木昨日、本家行ったの？」

萩ちゃんは本家に行かない限り会えないと
思っけど．．．

「うん。溜まってたからね」

何が？っていうのは仕事が。
私も溜まってるなあ・・・

「そっかあ私も行か「ちよーっと待て!!」」

なんだよ千津・・・

「本家ってなんや・・・？」

あ、しまった。言っていないや。

「佐久間組の本家」

ピシッ・・・って効果音が合うね、コレ。
見事に固まったよ柚木と萩ちゃんと私以外。

「さ、くま・・・!？」

「Yes」

「え、柚木と懔が!!!?」

佐久間っそんなに有名だったの?
なんか感動!?

「そこに正座しなさい」

こゝ怖いよ朱鳥さん・・・

「で？懺、どうゆう事？」

きみも怖いよ・・・冬夜くん・・・

「いやあゝ煉達が知らないのは知ってたけど
まさか冬夜達も知らないなんて・・・」

マジですから。

本気で知ってると思ってたし！！

「佐久間組って事は懺はただの組員って
事じゃないよね」

はい、その通りでございます．．．
今の組長は私．．．だけど高校生だから
祖父ってことになってる。

「一応、組長は祖父って事になってるけど
実際は私に全て決定権がある」

ようするに祖父は名前だけってこと。

「ふーん．．．柚木は？」

「えー．．．俺のことは別にいいでしょ？」

柚木は跡継ぎのいない佐久間にとっては
若頭みたいなもの。

「駄目。話して」

．．．言おうよ。お二方の後ろに般若と魔王が．．．

「もー怖いなあ。俺はねえ幹部だよ」

組の幹部にいる柚木。

私の幼馴染だからって理由じゃない。
ちゃんと幹部になれる強さがあるから。
まあ言っちゃえば副総長の来より強い。

「あ、最年少幹部ね」

高校生だしね。

「でも他にもいるじゃん、次期組長」

私に隠し事は不可能だよっ

「「「「は．．．」」」」

そーんな驚いた顔しなくてもよくない？？
苗字聞いたときから知ってたしー！

「ね、ねーんくん」

柊煉．．．柊組ってね繋がっちゃったわけ。

珍しい苗字だし確信してた。

「．．．ああ」

全く問題ないけどね。

「あきちゃん元気？」

柊秋良ことあきちゃん。
柊組現組長。

「親父のこと知ってんのか？」

「もっちゃん」

だって柊と佐久間は仲良いもん。

「あ、奏と陸矢と萩ちゃんも幹部だよ」

桜花を引退した人は大体佐久間に入る。

「「「「ええええ!!?」「」「」」

まあ萩ちゃんは例外。

「だからあんなに怖いんやな・・・」

「いやあれはもともとだよ千津」

でも奏って怖いかなあ？

怒ってもそんなに怖くないんだけど・・・

「ねえ今思い出したんだけどさ・・・

なんで幹部室いれてくれないの？」

みんなが、あつ・・・って顔した。

「ねえねえなんで？」

煉の顔を覗き込んで言うと、

「・・・目を逸らされた。」

「うりゅ・・・なんだよう・・・」

「煉――・・・?」

ちらつと横目で見られてまた逸らされる。
うー・・・あ、泣けてきそう・・・

「・・・・。」

煉から離れて柚木のところにいった。
こんな事で泣きたくなくて近くにいたら
泣けてきそうでした。

「懔・・・」

柚木は多分わかってる。泣きそうな事。

「おいで」

差し出された手を握ると柚木が微笑んで、
少し落ち着いた気がする。

「ちょっとお散歩してくる」

そつやって小さい時から助けてくれて・・・

「懺、大丈夫？」

お散歩とかいいつつ倉庫にある柚木の部屋にきただけ。

「ん・・・」

あんまり喋ると煉のいつもより素っ気ない態度と柚木の優しさに泣けてきそうで・・・

「泣いていいよ」

頭を撫でて優しい声をだすのは反則だ・・・
泣いちゃうでしょ？

「ふ・・・う・・・っ・・・」

ギュツと柚木の胸に顔を埋めて泣いた。

「．．．うう．．．．．ッく」

だんだん落ち着いてきた時に、
柚木が話し始めた。

「ねえ懐、俺ね嬉しいんだよ」

なにが．．．？

「懐に特別な人ができたこと」

特別って言うなら柚木だって．．．
來達に泣けって言われても私は泣かない。

「それでも変わらず俺といてくれる」

大切な人を失いたくない。
笑っていてほしいから。

「煉はねさっきの邪魔されたから
拗ねてるんだよ。」

それに好きな子に上目遣いされて
頑張って理性を保とうとしてたんだよ」

あれは邪魔されてよかったよ。
だってあのままだと抵抗しきれなかった。

「懔が俺の所来たとき
俺、物凄い睨まれたしね。
懔が俺の手握った時とか出てくときとか
今にも殴りかかってきそうだったよ」

．．．嘘。だって殺気とか全く感じなかった。
きつと告白は煉の気の迷いだったんだ。
ほんとは私の事なんて好きじゃない．．．

「柚木．．．どうしたら煉の気持ちわかるかな」

「煉も素直じゃないからね」

知ってる。素直じゃないけど、
不器用だけど優しいんだ。

「もう戻る?」

「やだ．．．後ちよっ．．「バアンッ」．．!!!」?

「やーっと来た」

なんでここに?

荒々しく部屋の扉を開けたのは

―――．．．煉

「懨こっち来い」

顔を向けると走ったのか息を切らしてる煉

「な．．．に．．．」

ゆっくり近付いてくと痺れを切らしたのか
腕を引っ張られた。

「わ．．．っ」

抱き締められて動揺する。

「勝手に離れてんじゃねえ」

「れ、ん・・・？」

どうしてそんな切ない声だすの？

「じゃーねえ」

柚木がでった部屋は静か。
だけど心地いいものだった。

「俺はお前が好きだ」

胸が高鳴る・・・どうして？嘘じゃないの？

「お前にとって安藤が必要なのも、
そこに恋愛感情がないのも知ってる」

「．．．うん」

柚木に恋愛感情を抱いた事はない。

「でも．．．嫉妬する」

なんか可愛い．．．

「んっ．．．」

「お前は俺のモノだ」

やっぱり俺様だった

「．．．ん、ッふ．．．煉．．．」

酸素を求めて口を開けばさらに激しくなる。

「．．．！！！！？んんっ．．．ハア．．．」

逃げてもすぐ舌でからめとられて
力が抜けた時やっ唇が離された。

「あの上目遣いは．．．ヤバかった。
他の男にやるなよ」

してるつもりないけどなあ．．．

「．．．幹部室、もう入れ」

入れておかしくない??
いれなかったのは自分達なのに!!

「はいはい」

でも嬉しいから見逃してあげる。

ガチャ

「ただいま」

ってあれ．．．誰もいない？

「煉、誰もいな．．．」

煉、どこ？

さっきまで横にいたのに．．．
部屋は暗いし怖いよ．．．

「れ、煉っ！！」

シーン．．．

あう．．．怖い．．．

「ゆ、ずき．．．？」

返事はない．．．
なんでっ？怖い、怖い怖い！！

「萩ちゃん．．．っ．．．」

怖いよ．．．涙がまた．．．

「来．．．．？冬夜あ．．．ゆーやー！！」

ううゝ．．．みんなどこお．．．？」

（ちょ、泣き始めちゃったよ）

（優弥まだだ）

（慄、暗いところ苦手なんだよ？
一人も嫌いだし．．．）

（仕方ないよ柚木）

（冬夜だつてでたいくせに．．．）

暗いし一人ぼっちだしで不安な私には
そんな声は聞こえなかった。

「楷．．．朱鳥ツ．．．」

コンコン

「失礼します．．．って暗！！あれ、慄？」

「うわあああん！！春ううう！！！！」

暗くて怖くて泣いてた私に救世主が・・・

「ど、どうしたんだよー!」

「ヒック・・・みんな、いないの・・・っ」

「はあ? そんなわけないだろ」

「怖かったああ・・・!!」

パニックに陥ってた私との会話不可能。

「つか離してくんね? 総長に殺される」

そっいえば春に抱きついてるんだっけ・・・

「やだ・・・怖いもん」

離したら春も消えちゃいそうで怖い。

(ねえ春殺してもいい?)

（駄目だ早まるな柚木）

（チッ．．．）

（煉も抑えてください）

（懔．．．）

「頼むから離してくれ．．．皆さんに
殺される．．．!!」

怖いもん!!やだああ!!

「お願い春．．．みんなが来るまで側にいて」

こんなところに一人でいられない!!

180cm位ある春と160cm位の懔との
身長差で上目遣いになってて、
顔が真っ赤になってる春に懔は気付かない。

「わ、わかったよ．．．」

「ありがと春！！大好きっ」

その言葉でさらに赤くなつた春に
そろそろ幹部達も我慢の限界に．．．

三十四

「はーるーくん　．．．死ぬ？」

春にしがみついていると突然聞こえた声。
この声は．．．！！！！

「ゆずきー！！！！！」

「よしよし怖かったあ？」

てかどっから出てきた？

．．．．部屋の中にいたよね？

「なんで隠れてたの？！酷いよっ」

真っ暗だったのも全部意図的にやった事！？

「えへへごめんね。」

でも言いだしたのは来だよ」

「柚木イイイ！！裏切るのか！？」

！？まさか全員いるの？

「え、だって本当の事でしょ？」

「つーかお前出てくの早えんだよ！！
もう少し隠れてろ！！
煉もちゃんと隠れてたんだぞっ」

．．．．．煉？

「れ〜ん〜くんっ出てきてよ」

ふざけてんなよ、馬鹿どもが

「あ？なんだよ」

えへへ〜なめてんの？

「なんだよ、じゃねーよっ!!」

「!!ってえな」

え？なにしたって？殴ったんだよ

「知るか!!こっちは・・・こっちは・・・
怖かったんだからあ・・・っ・・・」

「わかったから泣くなって・・・」

「泣い・・・て・・・ない、もんっ」

泣きそうだけど泣くもんか!!!!
こんなやつの前で泣かないもんっ

「あゝ煉が慄泣かせてる」

今は悪魔にしか見えないわ!!馬鹿諒!!

「ちよっ・・・懔、ごめんな？な？」

「ゆうくやあくっ」

まともなのは君だけだ!!

どっかの腹黒二人組は笑ってるし、

馬鹿共も爆笑してるし・・・楷は寝てるよ!?

「わわっ・・・／／／／」

「・・・おい、御堂」

優弥に抱きついてるとひくひくい声が・・・

「俺!?!これはお前らが悪いだろ!?!」

「・・・あ？」

煉サンです。

「煉なんか嫌いっ」

「あわわ．．り、懔っ．．それはヤバイ．．」

なによう．．．ヘタれ？優弥はヘタれなの？

「ヘタれじゃないっ！！」

えゝでも煉にそんなビビってたら．．．
ヘタれでしょ。

「違う！！」

ってかまさかのまさかで．．．

「声にだしてる！？」

「思いつきりな」

「うみゃ！？」

腕．．！！肩の関節外れる！！

「んっ．．．！？ふ．．．あ．．．」

え？え？ええ？！

き、キスされた．．．？

「隙、ありすぎ」

「ば、馬鹿煉ー！！！！」

みんないる前でなに堂々としちゃってんの！？
羞恥というものはないのかー！！

「嫌じゃないくせに」

ぎゃー！！！！やめてー！！
思わず柚木の後ろに隠れた。

「ちょっと煉今はやめてあげなよ」
なんか怯える仔猫みたいになってるよ」

今は！？今はって言いました？柚木さん！！
今じゃなけりゃいいの！？

「．．．そうだな。ボソッ．．．後で」

今ボソッと後でって言わなかった！？
に、逃げなきゃ．．．！！

「しゅーちゃあゝん．．．」

ああ．．．なんか疲れたよ．．．．．
いつの間にか春はいないし．．．．

「ん？あ、懨お疲れ様。煉と付き合ってるの？」

そうですね。俺様ですけど？

「秋良さんの息子だよね？」

そーですよ．．．てかいつの間に仲良く？

「うん、問題ないね」

なにがですか．．．萩ちゃん．．．
すごく怪しいよ、そのスマイル．．．

「今日わかるよ。本家いくから」

へー．．．本家ですか．．．うて、え!?

「聞いてない!!」

「だから迎えにきたんだよ」

退院してすぐだよ？

「あ、もう時間。ゆずも行くよ」

よかつた〜柚木も一緒か．．．
あ、別に家族関係が悪いとかじゃないよ？
まあ．．．わかるよ。

「はい。って事だからじゃーね」

「「「オiiiiイ!!」」」

みんなの突っ込みを無視して車に行った。

――――

「・・・て・・・き・・・」

「ん・・・」

「おーきてっ」

んぬ・・・柚木おはよー

「懐、着いたよ。組長のところ行っておいで」

萩ちゃん・・・ヤダよ・・・

「萩さん、俺は？」

「ゆずも一緒に」

だっとおじいちゃんって……

「りーんー！……！」

「うげ……」

「遅かったのお」

孫LOVEだから……

「組長……慄が死にかけてます」

助けてええ……柚木……

「おお！！ゆず坊か！！」

「いや……ゆず坊って歳でもないですって……」

「がはは！！わしの事もじいちゃんと
呼んでくれ！！」

「無理です」

押されてるよ．．．おじいちゃんの勢いに．．．
止めよう。うん、帰りたいし。

「おじいちゃん、話って何？」

「おお、そうじゃったな。

では、わしの部屋に行くぞ。

萩は夕飯の手伝いでもしてやってくれ」

「はい」

はあ．．．やっとか。

「「「お嬢、頭、柚木さんお疲れ様です！」「」「」

いや、なにもしてないよ？

全くもって疲れてないです。

君たちのが疲れてんじゃないすか？

「おお、お主ら萩を手伝ってやるのじゃ」

「「「はいっ！」「」」

――――

「懔、よく聞くのじゃ」

部屋に入るといつになく真面目な面持で
おじいちゃんは話しはじめた。

「お前に……」

見合いを考えておる」

「「え！？」「」

い、いきなり！？

えええ！！？高校生だよ？しかも一年！！

「ま、待ってください！！」

そんなのいきなりすぎませんか？！」

ほら、柚木も言ってるよ？

「ならゆず坊はどうじゃ。

よく知つとる相手じゃろっ?。」

なぜ柚木ー!!!?

「い、いやいやいや!!!!!!

俺まだ死にたくないです!!」

死ぬ!?!なんで死ぬ!?!...あ、煉

「まあ待て。その見合い相手じゃがの

イケメン(?)っていうんか?

まあ顔がええんじゃ。

どうじゃ?考えてみんか」

顔とかの問題じゃないー!!!!!!

煉に言ったら何されるか.....!!

「だ、誰なの?その相手...」

する気ないけど。

「懐も秋良の事知つとるじゃろ？
その柊の息子じゃ」

．．．．．柊？

「．．．．．煉」

柚木と顔を見合わせた。

「ねえ懐．．．煉って柊組だよね？」

「う、うん」

「じゃあ見合い相手って煉？」

いや、もしかしたら違つかもだし．．．

「おじいちゃん．．．その相手って
暴走族の総長やってる？」

「おお！！興味を持ったか。
たしかにやっ取るぞ」

可能性・・・大

「その暴走族の名前・・・わかる？」

「たしか・・・海龍」

はい決定！

「ねえその総長の名前って柊煉？」

「なんじゃ、知り合いか？」

うん、まあ知り合い・・・だね。

「あ・・・まあ「煉と凜は付き合ってますよ」

すごいアッサリ言っちゃったけど・・・
柚木サン・・・

「おお！！そうだったのか！？」

丁度いい、煉くんを呼ばうじゃないか」

えー！！！！マジですか？！

ガラ

「竜樹く！！来たぞー」

．．．．いやだ。

「柚木、逃げよう。今すぐ」

「む、無理だよ．．．

もう屋敷の中に入ってきてる」

ヤダアアア！！！！！！

「お願いー！！ね？？」

「じめんね」

ううー．．．やだあ．．．

パタリと柚木の膝の上に倒れた。

「頭、柊さんがいらしゃってます」

「通せ」

「はい」

ガラッ

「りーんちゃん」

あううう．．．．．

柚木に抱きついて顔を隠した。

「すみません．．．秋良さん．．．」

謝んなくていいんだよ柚木ー！！

「相変わらずゆず坊にベッタリだなあ」

うるさあーい！！顔あわせたくないんです！！

「．．．おい」

「こらー！お前なんて口の聞き方を」

．．．．．え？幻聴？幻聴だよね？？

「．．．．．慄」

「慄ちゃんを呼び捨てにするな！！」

幻聴じゃないようです。

「れ、煉．．．！！」

パツと顔をあげると、そこには
あからさまに不機嫌な煉様が．．．．

「な、なんでキレてらっしゃるのでしょっつ、」

「あ”あ”？」

ヒイイイ！！！！

怒ってるよ！！なんで！？Why！？

「はいはいわかったから怒らないでよ」

柚木！！何がわかったの！？

「わあっ！？」

「つと．．．危ねえな」

ぎゃー！！投げるなよ！！

しかも不機嫌総長様のところに！！！！

「ボソツ．．．お前安藤とイチャついてんじゃ
ねえよ」

ビツクウ！！！！！！

み、耳元で喋るなあああ！！！！！！

前も言わなかったっけ！？

てかイチャついてないし！！

「降ろして!!」

「無理」

出来るだろー!!!!!!

「っお願い!!」

「無理」

何がだー!!!!!!

「煉っ・・・おね「まあまあ」

まあまあじゃないしー!!!!!!

親父が二人そろってニヤニヤすんな!!

「なーんだラブラブじゃねーか」

「そうじゃな」

「そっなんですよ。もう俺らも呆れるくらい」

柚木ー！！便乗しないでえ！！

「もう分かってると思うがお二人さんには

高校を卒業後結婚してもらいたい。
様子を見てればラブラブだしいいな」

あきちゃーん様子で決めちゃう！？
てか結婚て！！！！

「じゃ、わしらは大広間におるからな。

懐、煉くんに屋敷を案内してやれ。
じゃあ仲良くのお」

ガラガラ・・・ピシャン

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・案内するよ」

「お前の部屋見たい」

私の部屋？別にいいけど・・・

「なんもないよ？」

「いい」

って事で部屋にきた・・・けど。

「煉・・・？離して下さい・・・」

「嫌」

「おねがっ・・・んんっ・・・ふぁ・・・」

「その顔・・・ヤベエ」

「ちよっ・・・れ、ん・・・」

入って座るとこないんでベットに座ると
押し倒されちゃった 的な。

「んやッ・・・やめ・・・」

「なんで？」

そんな問いかけいりませんー!!!!!!

「ほら、おじいちゃんもいるし・・・
あきちゃんだって・・・っ・・・」

「きにすんな」

気にします!!!!!!

「だ、駄目だつてば・・・!!!!」

「俺とすんの嫌？」

き、ききき聞くなー!!!!!!
それになんか可愛いしっ・・・

「ち、違うけど・・・っん!？」

「なら問題無い」

あります!!!!!!

ッガン

「いってえ・・・」

「わわわ・・・ごめんねっ・・・大丈夫!？」

おもしろいきり突き飛ばしちゃったあ!!

三十五

「はう．．．．．煉くーん．．．．．」

「．．．．．」

「ねえってば．．．．．」

「．．．．．」

「いめんね．．．．．」

「．．．．．うるせえ」

うるさい、か．．．．

まあそうだよな。付き合ってるのに．．．．．
嫌がっちゃったもんね．．．

「．．．．．出てくるね」

自分が悪いとわかってるけど．．．
でも拒絶されるのは辛いんだよ。

「ふえ．．．ッう．．．」

外に出て、敷地内にある離れにきた。

ココに入るには鍵が必要で、

持つてるのは柚木と萩ちゃんと私だけ。

「ッ．．．．ふ．．．」

ガチャ

「ほえ．．．？」

誰？開いたって事は柚木か萩ちゃん．．．？

「ったく．．．急にいなくなんじゃねえよ」

「なんでっ．．．！？煉．．．！！」

扉の鍵は閉めたはずだし．．．

「安藤に鍵渡された．．．」

柚木．．．．．なにしてんの．．．

「お前が嫌ならやんねえよ」

「そうじゃないのっ!!」

煉が嫌なんじゃなくて．．．その．．．」

言いくいつてゆーか．．．ね、

「は、初めてだから．．．ちょっと怖いだけ．．．」

うう．．．めんどくさいよね．．．
処女とかさ．．．

「ばーか知ってる」

「んッ．．．」

優しくキスして抱き締められた。

「今はやんねえけど、あんま煽ると．．．
わかんねえぞ」

「あ、煽ってないし．．．!!」

てゆかね、この体勢どうにかしよ。
煉の膝に向き合って座ってる。

．．．近い。顔が近いイイイ!!

「顔、赤いな」

「!!ゆ、柚木達のところこつ
ご飯出来てる頃だしね!!」

立ち上がるうとしたけど抑えられ．．．失敗。

「れ、煉？」

「あ？んだよ」

「降ろしてくれると嬉しいなあ．．．」

「嫌」

煉にお姫様抱っこされるしまつ．．．

「いくんだろ」

そうですけど．．．．．

「じゃあ別にいいだろ」

よくないいいい！！！！

些細な抵抗も虚しくそのまま連れてかれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2963r/>

蝶姫

2011年7月9日12時27分発行